子どもの生活時間と遊び（1）

教育心理学研究室

井　上　健　治

I　問　　題

子どもは，将来成人になったとき社会的に十分な生き方ができるように，その準備としての教育を受けているが，同時に，しばしば忘れられがちではあるが，現在の子どもとしての生活を生きぬく権利をもっている。したがって，子どものより良い将来のためばかりでなく，より良い現在のために可能な限りの条件を用意することは社会の果すべき義務である。

われわれがここで子どもの遊びの問題をとりあげるのは，それが子どもの将来に対して，家庭や学校での意図的な教育に劣らぬ力をもつと考えるからでもあるが，同時に，子どもの現在を重視する立場から，子どもが子どもとして生きるためには，その生活に欠かせぬ活動としての遊びが満たされる必要があると考えるからである。

ところで，遊びはその重要さに比較して軽く扱われすぎてきたように思われる。たとえば，「よく学び，よく遊べ」という校訓をかかげる学校は昔から多かったが，学ぶ（といってもこの場合，明らかに教科の学習を意味している）ことと遊ぶことが対等の扱いを受けていたとは思われない。むしろ「勉強」や貧しさの中の「労働」に対する「遊び」は，怠けであり，不まじめであり，無駄であるとされることが多かったであろう。子どもの遊びは，奨励されるようでいて，実はせいぜいのところ黙認されあるいは放任される活動でしかなかったといってはいいすぎになろうか。

心理学者の間でも，いわゆる学習についての研究は無数になされているが，遊びという活動はそれほど関心をもたれなかった。また，学校教育で指導計画の中に遊びをとりいれている学校は日本中を探してもかぞえるほどしかないだろう。

これらのことにはそれなりの理由が考えられる。遊びは子どもの自発的意志にもとづく自由な活動だという特徴をもつから，大人に注目されなくてもよい，むしろ，ある意味では放任すべきものですらある。そして，いつの時代にも子どもたちは堂々と，あるいは勉強させられ働かされながらも，親の目をかいくぐって遊びにうちこみ自らを成長させてきた。遊びは十分な市民権を与えられていなかったかもしれないが，子どもたちは実質的にそれを奪ってきたのである。ところが，そのことが社会環境あるいは社会生活の急激な近代化・都市化に対応して行き届かせなければならなかった遊びに対する格別の配慮を怠らせ，その間に子どもたちの遊びをめぐる条件は極度に悪化して行ったように思われる。

それほど昔にさかのぼる必要はない。10年，あるいは20年以前と比較して，今日の子どもたちの生活の中での遊びは質と量の点でどういう変化をみせただろうか。このことについては最近になって多くの議論がなされている。それらを参考にしつつ筆者の考えをまとめるならば，仮説的につぎのような問題点をあげることができよう。

(1) 遊び時間の不足　遊びに夢中で宿題をする暇がなくなったのは昔話で，勉強やけいこごとに追われて遊ぶ暇がないのが現代の子ども，といっては少しく誇張にすぎるが，子どもに対する諸種の調査から見る限りでは，遊ぶための時間の不足が遊びの量の減少につながっているように思われる。

(2) 遊び場環境の悪化　都会で〝原っぱ〟ということばを聞くことは稀になった。過密と自動車交通量の激増は，子どもたちの安全で変化に富んだ遊び場をつぎつぎに奪って行く。このことを否定できるものはいないであろうが，この状況がまた遊びの量と質に大きな影響を与えている。

(3) 遊び仲間の不在と質の変化　忙しい子どもの存在は，忙しくない子どもの遊び仲間を減らす。近隣での遊び場不足は地域の子どもたちとの接触を妨げる。きょうだいの減少はきょうだいを通しての年上，年下の仲間との遊びの機会をなくす……。仲間との関係の変化は当然遊びの質を変える。

(4) **テレビの影響**　テレビが遊びにとって代るという置き換え効果がないだろうか。小学校も高学年になると，遊ばない理由として〝テレビの方がおもしろい〟ことをあげるものが多く見られるし，一方，テレビ視聴によって〝子どもらしい〟遊びが失なわれて行くという指摘もある。

(5) **商業主義の影響**　テレビも含めて子どもを金儲けのダシに使うことが平気で行なわれる社会である。えんぴつけずりからタイマーに至るまで備えつけられた勉強机はその一例だが，何もかも用意された遊び道具や，子どもの発達に対して無神経な遊具が子どもの遊びの自由度をせばめ，子どもの発達をそこなうのに役立っていないだろうか。

(6) **子ども自身の意識の変化**　上記のすべてに関連して，あるいはその結果として子どもの遊びに対する意識の変化が懸念される。むしろ最も大きな問題だといってもよいだろう。外遊びをなぜしないのかの調査に対する回答の中に，外へ出るのがめんどうくさい，外遊びをすると疲れる，というものがかなり多く見られる。子どもは外で元気に遊ぶもの，というのは一種の固定観念にすぎぬという議論も出ようが，〝外へ出るのがめんどうくさい〟のが子どものまともな発達の姿とも思われない。

本研究は遊びについての理論を構築するためのものでもなく，遊びの人格形成上の影響力についてもほとんど言及できないだろう。というよりも，むしろ当面の問題として，子どもたちの遊びの量を中心にとりあげて考えたい。すなわち，われわれの現在の関心は，遊びの理論や遊びの効果の前提として，子どもたちの生活の中で遊びがどのような位置を占め，それがどのような環境条件に関連しているかを明らかにすることにある。なお，その際，前記の問題点の中でも主として遊び場環境の要因が考慮される。そのために，たまたま10年前に別の目的のために行なわれた生活時間調査* の結果との比較もなされる。

仮説はあらためて設けることをしないが，現代の（少くとも都会の）社会環境の貧弱さが子どもたちの遊びの市民権を奪っているという認識が本論文の出発点となった。

論文執筆の際の時間的制約から，調査資料を十分に分析するに至らなかったため，本論文は比較的大まかな結果のみを報告する。

---

* テレビの影響調査の一環として行なわれた。
井上健治(1964)：幼児・児童のテレビ視聴の実態
依田新編，テレビの児童に及ぼす影響，東大出版会
加藤礼子（1962）：幼児・児童の生活時間の研究
1962年度東京大学大学院人文科学研究科修士論文

II　調査の内容と方法

1　調査の内容

第I章でのべたように，この調査は1962年調査との比較を一つの大きな目的としているため，調査内容も共通の部分が多い。

1)　フェイスシート

子どもの生活時間の構成・構造を規定すると考えられる諸条件の中から，家庭環境要因としてつぎの事項をとりあげた。

a　社会・経済的背景

父親（または母親）の職業（勤務先，職名。勤務先あるいは自営の規模をも含めて）と学歴。これは家庭の社会階層を判定するために用いる。

b　家族構成

本人との続柄および年齢。

c　住居状況

部屋数および広さ（たたみ数に換算）。

2)　親の態度および意見

a　教育観・テレビ観・遊び観

子どもの将来に対し親はどの程度手を加えるべきか。教育的にみてテレビは益と害のいずれが多いか。子どもの生活の中で勉強と遊びのいずれを重視するか。現代の子どもの遊びの質と量をどう見ているか。等々。

b　遊び場の状況

自分の子どもの遊び場は十分に与えられているか。子どもはどのような所で遊んでいるか。

上記の質問項目には，子どもたちの遊びや生活時間に影響する要因として直接的に関連させて分析するためのものと，考察をすすめる上で得ておきたい一般的な背景の両方のものが含まれる。

3)　子どもの生活時間

平日（火曜日または金曜日）および日曜日の２日間について，午前６時から午后10時までの子どもの行動の時間と内容，そして行動をともにした相手について生活時間表に記入を求めた。

そもそも生活時間調査の様式としては，各時刻におこなわれた行動をあらかじめ定められている行動項目に分けて時間を追って記入するものと，時間の目盛りだけを与えて，その目盛りの時刻に行なった行動を自由に記述するものとがよく用いられる。前者は，印刷された行動項目が記入の際の想起の手がかりとなるため，記入洩れを少くするという利点があり，また記入の労も後者に比べれば少い。その反面，あらかじめきめられた行動項目

に影響されて記入に偏りが生ずるおそれもある。後者は行動項目があらかじめ定められていないため，なされた行動を詳細に記述し，あるいは行動のすべてを網羅できる可能性をもつ。しかし，一方では想起の手がかりが与えられていないため記入洩れが起りやすく，各行動の時間量が過少に評価されがちである。

1962年の調査では，これらの長短を考え合せた上で前者，すなわち，あらかじめ行動項目を定めた方式を採用したのであるが，今回も，主としては前回との比較の必要上から，さらには前回調査方法に決定的な欠陥は見出されなかったという経験から，まったく同じ記入様式を採用した。

前回調査における行動項目や記入様式決定の詳細な経緯は省くが，従来の研究(NHK文研 1960，依田 1964)を参考に，予備調査を経て決定されたものである。行動項目はつぎの通り。

睡眠，食事（おやつ），入浴・洗面，学校での生活，勉強，テレビを見る，本を読む（マンガ・絵本を含む），ピアノ・図画・バレエなどの練習（に行く），外出・訪問，室内で遊ぶ，戸外で遊ぶ，手伝い，雑談，特に何もしていない。

以上のほか，その他（　　）の欄を２つ設け，具体的に記入してもらった。

2　調査方法

調査についての趣旨説明と協力の依頼状

生活時間表記入のしかたの説明

質問紙（フェイスシートおよび親の態度・意見）

生活時間表（1）

生活時間表（2）

以上を一括して封筒に入れ，生活時間調査第一日の１日あるいは２日前に学校（学級担任教師）を通して児童に配布する。また，生活時間調査第二日の翌日から２，３日の間に同じく学級担任教師に回収してもらう。

なお，フェイスシート部分に記入することに対して父母から抵抗があるのではないか，という依頼校教師からの示唆が２，３あった（期せずして〝時代が変った〟ということばが共通して聞かれた）ので，無記名の調査となった。この点は前回と異るところである。

3　調査対象

1962年調査との比較という目的から，調査対象としては前回と同じ地域を選ぶ必要がある。したがって，原則として前回と同じ小学校に依頼することを心がけた。しかし，今回は協力を得られなかった学校もあり，後にのべる理由から前回より数多くの学校を選ぶ必要があったりして，まったく同じというわけにはいかなかった。その際代替校を選ぶには，地理的に近いこと，環境条件や家庭の社会・経済的階層の構成が類似していると思われること，などを条件とした。決定に当っては地域の小学校教師の上記についての意見を尊重した。

また，生活時間の構成・構造には調査当日の天候・気温などが影響することが考えられる。1962年調査時の天候・気温をあらかじめ示して，指定日がそれと余りにくいちがう時には別の日に延ばしてもらう，という方法も考えられなくはないが，一人一人の記入者にそれを徹底するのは不可能である。したがって，調査対象をいくつかの群に分け，それぞれに別の日を指定して危険を分散するという方法をとった。

実際には，２群に分けるのがせいいっぱいであった。同一学校内で２群に分けることは，調査用紙配布や回収に当って，学校側に対して二重の負担をかけることになるので，学校を２群に分けた。その際，両群をほぼ等質（地理的にも環境的にも家庭の階層の面でも）になるよう，また，いずれの群も全体として前回調査対象と大きくくいちがうことのないよう配慮しつつ対象校を選んだものである。

結局，調査対象はつぎの通りである*。

東京都内小学校１年児童 4,484 名（調査に対する回答はその母親または父親もしくはそれに代る者）

調査日・地域別調査校及び調査人数は表Ⅱ－１の通りである。

表Ⅱ－１　調査対象校・人数（カッコ内）

	Aグループ	Bグループ	計	(1962年調査)
商業地域	5(　476)	5(　533)	10(1,009)	6(　469)
住宅地域	6(1,168)	6(　864)	12(2,032)	11(　980)
工業地域	5(　668)	5(　775)	10(1,443)	4(　531)
計	16(2,312)	16(2,172)	32(4,484)	21(1,980)

Aグループ　３月５日（日）７日（火）調査
Bグループ　３月10日（金）12日（日）調査
商業地域は10校とも台東区内，住宅地域は港区４校（A，B各２），目黒区３校（A1，B2），世田谷区１校（A1），杉並区４校（A，B各２），工業地域は 10校とも大田区内の各小学校である。

* 遊びに対する時間的・空間的制約の影響を最も強く受けているのは，小学校の上級学年ではないかと考えられるが，1962年調査との関係で小学校１年生を対象とした。なお，前回では幼児についても調査したが，今回は実施しなかった。

4　調査期日

Aグループ　1972年3月5日(日)，7日(火)

Bグループ　1972年3月10日(金)，12日(日)

上記のうち，Bグループの調査日である3月10日は東京都内は地域によって夕方（午後3時ないし4時ごろ）一時雨があった。また，3月12日はほぼ全日雨であった。したがって，Bグループについては調査日の天候に直接影響される生活時間の資料は今回の分析では使用し得なかった。(質問紙の結果は用いた。)

Aグループ調査当日の昼間の天候および気温はつぎの通りである。

3月5日（日）	はれ	気温	正午	10.0°C
			15時	9.9°C
3月7日（火）	はれ	気温	正午	10.6°C
			15時	12.0°C

両日とも平年気温より 1～2° 高い。

対象校の一つで，7日午後学校行事のため帰宅が1時間おくれたほかは，一般の子どもの生活時間に影響を与えるような出来ごとはなかった。

5　データの回収と選択

1)　回収状況

調査票の回収状況はつぎの通りである。

表Ⅱ－2　回収状況（カッコ内回収率）

地　域	Aグループ	Bグループ	計
商	428(89.9)	503(94.4)	931(92.3)
住	954(81.7)	740(85.6)	1,694(83.4)
工	573(85.8)	680(87.7)	1,253(86.8)
計	1,955(84.6)	1,923(88.5)	3,878(86.5)

回収率に若干の地域差が見られる。BグループがAグループより回収率が高いのは，前述のようにBグループの調査日である3月12日(日）に雨が降ったため，生活時間調査表が記入しやすかったためではないかと思われる。なお前回の回収率は87.6%であった。

2)　使用したデータ

これはいくつかの段階に分けられる。

a　質問紙（フェイスシート及び態度・意見調査）

子どもの性別を記入していないもの，家庭状況の記入が著しく不備なもの，および態度・意見調査7項目(遊び場の自由記述の項を除く）中2項目以上に無答のあるものを除いた。使用可能のデータ数は以下の通りである。この段階では居住地域別に集計が行なわれている。

表Ⅱ－3　質問紙に関する有効資料数

	男	女	計
商	443	429	872
住	836	802	1,638
工	551	604	1,155
計	1,830	1,835	3,665

この数は回収資料のうちの94.5%，全調査対象数に対しては81.7%にあたる。

b　生活時間調査全体集計

さきにのべたように，Bグループは調査当日雨天であったので，ここではAグループのみを分析の対象とする。

生活時間調査はその記入のわずらわしさから記入洩れの多いことを免れない。そこで，まず記入すべき16時間（午前6時～午後10時）中13時間以上記入されているもののみを有効とする。この段階の分析では日曜日と平日を別個に扱ったので，表Ⅱ－4にみられるように，日曜日と平日のデータ数に相当の差が生じた。このうち，日曜日分が使用可能なもののうちの大部分は平日分も使用可能であり，平日分が使用可能なものの中には日曜日分がデータ不備のものがかなりあった。つまり，全体としては両日とも使えるか，あるいは両日とも使えないデータが多数で，一方の日が有効で一方が無効なデータは相対的に少く，その大部分は日曜日のみ無効なデータだったということである。日曜日の無効が多いのは，行動が変化に富むために全体を追いにくいことと，平日のように学校へ行っているという画一的な時間がないためであると思われる（この傾向は前回調査も同様であった)。

そのほか，外出時間の極端に多いもの(約8時間以上)も除外したがこれは徹底したものではない。外出時間の多いものを除いたのは，その時間は他の行動と両立しないため，子どもの行動の自由度がないからである。しかし，この方針は若干の問題点を残した*。

この段階でのデータ数は表Ⅱ－4の通りである。

表Ⅱ－4　生活時間全体集計データ数

	日曜		平日	
	男	女	男	女
商	123	130	163	164
住	339	329	394	383
工	151	160	184	209
計	613	619	741	756

* 後で必要に応じて述べる。

このデータ数は，回収された数の中の，日曜日で63.0%，平日で77.8%に当る。地域別にみると住宅地域ではその比率が高く（日曜70.0%，平日81.4%），商業地域がこれにつぎ（日曜59.1%，平日76.4%），工業地域が最も低い（日曜54.3%，平日68.6%）。

このようにデータを除外して行けば，残るデータには当然偏りが生ずると考えられるから，サンプルの代表性は薄れて行くことになるが止むを得ない。なお，いうまでもなく前回も同じ規準であった。

c　生活時間調査サンプル集計

生活時間の単純集計のほかに，行動の時間的推移や行動をともにした相手を分析したり，日曜日と平日の行動の関係を検討するためには両日とも完全なデータのそろったサンプルが必要になる。また，1962年調査との比較のためには同じ程度の完全さのデータを使用した方がよい。以上のようなことから，全体集計の中から

(1)　日曜，平日のデータが両方とも使用可能なもの

(2)　行動の相手の記入がほぼ完全になされているもの

(3)　職業・学歴欄などの記入が社会階層分類（後述）可能な程度に完全なもの

(4)　態度・意見調査に対する無答が一項目以下のもの

などを条件として資料を選んだ。1962年調査のようにサンプル数を限定してその数だけ選ぶということはしなかったが，より完全なデータを残すという作業はそれを重ねるうちに階層Ⅰのデータの占める率が次第に高くなって行くので，階層Ⅰについてはサンプルを全体の3分の1とし，他の2階層は使用可能なデータのすべてを用いた。なお，階層別の構成が1962年調査と異なるが，比較の段階で考慮に入れることにした。したがって，サンプルの合計は1962年のものと若干異なる性質をもつ。

表Ⅱ－5　サンプル集計データ数

階層	1972年		1962年	
	男	女	男	女
Ⅰ	121	115	80	80
Ⅱ	89	70	40	40
Ⅲ	92	95	40	40
計	302	280	160	160

6　結果の整理

前述のように，使用したデータがいろいろな段階に分れているためやや煩雑であることを免れないが，これは結果を表す時にその都度示すことにする。ここではそれ以外の主要な分析の観点を示す。

1）家庭の社会階層

a　家庭の社会的・経済的あるいは文化的環境が，子どもの生活の背景にあり，それに大きく影響すると考えられること。

b　調査対象のサンプリングが厳密さを欠くので，この結果をそのまま都内の小学校1年生の一般的傾向と推定するのは危険であること。

c　回収された資料，さらにはその中で使用可能な資料は，その回答のわずらわしさから，回答のための時間的余裕があり，しかも知的水準の比較的高いものに偏っていることが予想されること。

d　1962年の調査で，社会階層という枠組を設けて，それに従って分析を行なったこと。

以上のような理由から，家庭の社会階層別の分析がなされた。階層は大きくⅠ，Ⅱ，Ⅲに分類したが，その判定は父親（あるいは母親）の職業，勤務先の規模・地位，それに学歴などを参照した。分類の基準はおよそつぎの通りである。

階層Ⅰ　自由業，専門的・管理的・事務的職業，販売的（大企業における）職業。つまり，ほぼホワイトカラーに相当すると思われるもの。

階層Ⅱ　小企業主（使用人20人ぐらいまでの工場，商店などの主）

階層Ⅲ　労務的職業，販売的（小企業における）職業。つまり，ほぼいわゆるブルーカラーに相当すると思われるもの。

2）生活時間の整理

a　行動項目の分類

(1)　「食事」と「洗面・入浴」は「日常習慣」としてまとめる。

(2)　「雑談」「特に何もしていない」は他の行動と重複しているときはもう一方の行動だけを生かし，重複していないときは「不特定行動」としてまとめる。空白も「不特定」として扱う。

(3)　重複して記入してあるものについては，矛盾のないものは原則として両方生かし（ex. 食事とテレビ），矛盾したものは時間を折半する（ex. 戸外遊びと室内遊び）かそれが不適当なものは除外する。

そのほかの詳細については省略する*。

b　行動時間の計算

30分を1単位として計算し，端数は0.5，つまり15分まで認めた。記入された線の長さが5分程度に相当するものは切りすて，10分に相当するものは0.5単位，つま

* 加藤（1962）参照。

り15分として計算した。

なお，午后10時から午前6時まではすべて「睡眠」としてかぞえた。

c　行動の相手

d　各時間帯における行動

c，dについてはその必要が起った段階で説明する。

Ⅲ　親の態度および意見

本章では，調査内容の前半，すなわち質問紙による親の態度・意見調査の結果を示す。すでに説明したように，この部分はAグループ，Bグループを問わず使用可能なデータをすべて居住地域別に集計した（全体集計）。一方，生活時間調査サンプル集計では，Aグループの中の一部が社会階層別に集計されている（以上Ⅱ．5．2)を参照）ので，ここでは調査項目の特質によって（とくに1962年調査と共通の項目は比較の必要上）階層別のサンプル集計の結果を示すことにする。なお，その際，前者（全体集計）の結果をも併記しておく。結果を示す表のうち「全」とあるのはそのことを意味している。

1　教育観・テレビ観・遊び観

子どもの遊びや生活を規定する条件の一つとしての親の意見，態度を概観する。

1）教育観

簡単に教育観とよんでおくが，つぎの質問による。

あなたが，お子さまの教育について持っておられるお考えは，次のどれにあたりますか。最も近いと思われるもの一つに○をおつけください。

(1)　子どもは，親がその将来について，とくにこまかく気をくばってやらなくても，能力に応じてのびてゆくものである。

(2)　子どもの将来については，いつも親が気をくばってやる必要はあるが，無理をしてはいけない。

(3)　子どもの将来については，子どもにとって多少無理と思われることがあっても，親が積極的にしむけてやるべきである。

選択肢(1)を楽観，(2)を中庸，(3)を積極型とそれぞれ名づけると表Ⅲ－1のようになる。中庸型が70%強をしめる。文字どおり中庸的で無難な意見であるから当然といえばいえる。のこりの中の大部分は(1)の楽観型であり，〝多少無理でも積極的に〟はごく僅かである。階層別では階層Ⅲで，子どもの性別では男子で，楽観型の多い傾向がみられるが有意差はない。

表Ⅲ－1　教育観

		楽観	中庸	積極	無答	N
1972年	Ⅰ	22.5%	75.3	2.2	—	236
	Ⅱ	21.8	75.7	2.5	—	159
	Ⅲ	24.6	73.2	2.2	—	187
	計	23.0	74.7	2.3	—	582
	全	26.1	70.1	3.2	0.7	3,665
1962年	Ⅰ	15.1	79.9	5.0	—	697
	Ⅱ	16.9	78.2	4.9	—	414
	Ⅲ	17.7	76.3	6.0	—	350
	計	16.2	78.6	5.2	—	1,461

1972年計と1962年の間に有意差

この項目で目につくのは10年前の結果とのちがいである。10年前と比較して今回は楽観型がすべての階層を通じて増加し，中庸，積極が減少している。昨今のいわゆる〝過度に教育熱心な〟親の増加という現象を考えるとこの結果はやや意外にも思われる。人間の発達に対する楽天的な信頼が定着しつつあるのだ，とみることも可能かもしれないし，現実があまりに〝教育過剰〟になりすぎていることに対する，タテマエとしての楽観論が示されたものとみるべきかもしれない。

2）テレビ観

ここでテレビ観とは，次の問いに対する反応をさす。

テレビの教育的な益あるいは害について，どのようにお考えですか。次の意見のうち，あなたのご意見にもっとも近いもの一つに○をおつけください。

(1)　テレビは教育的に好ましいものであるし，問題となるような害もない。

(2)　テレビは教育的にみれば，とかく害もあるが，益の方が大きい。

(3)　テレビは教育的にみて，よいともわるいとも云えない。

(4)　テレビは教育的にみれば，益よりも害が大きい。

(5)　テレビは教育的にみて，害こそあれ，益はまずない。

すなわち，テレビ観といっても，「子どもの教育上からみて」テレビをどう思うか，という質問である。選択肢(1)～(5)をそれぞれ「きわめて好意的」～「きわめて非好意的」と名づける。結果は表Ⅲ－2。

この項目も10年前の調査と共通のものである。全体としてみれば，好意的なものが約1/3，中立が1/2，非好意的なもの1/6の割合で，非好意的なものより好意的なものの方が多いのだが，10年前との比較では，好意的な意

表Ⅲ－2　テレビ観

		きわめて好意的	やや好意的	中立	やや非好意的	きわめて非好意的	無答
1972年	Ⅰ	4.3%	30.3	44.9	19.2	1.3	—
	Ⅱ	3.8	32.9	48.1	14.6	0.6	—
	Ⅲ	6.5	25.3	53.2	14.5	0.5	—
	計	4.8	29.4	48.5	16.5	0.9	—
	全	5.4	28.6	47.8	15.8	1.5	0.9
1962年	Ⅰ	7.6	38.8	40.2	12.1	0.3	1.3
	Ⅱ	9.3	32.1	41.7	11.8	1.2	3.9
	Ⅲ	9.4	27.2	46.9	10.3	1.4	4.8
	計	8.2	34.3	42.2	11.6	0.8	2.9

1972年全と1962年の間に有意差

見が顕著に減少している（きわめて，ややを合せて42.5%→34.2%）。

これにはいろいろな原因が考えられる。

a　テレビの番組内容が10年前より悪くなったこと。

一億総白痴化とか，暴力番組は子どもの非行化を促すとかいうようなテレビ番組批判は前回調査時にも盛んであった。いや，現在よりも多かったといってよい。その批判が正鵠を得ていたか否かはともかくとして，批判が下火になったということは番組内容の向上を意味するものではなく，むしろ番組の俗悪さに馴れてしまったことを示すものではあるまいか。いまここでテレビ番組批判論を展開する余裕はないが，番組の動向に対するいろいろな意味での歯止めが失なわれてきていることは事実だろう。

b　テレビの新奇さから来る好意度が減ったこと。

前回の調査時点（1962年）はテレビ普及が漸く山を越した（われわれの調査対象で普及率90％弱）ころである。しかしテレビが家庭に設置されてから3，4年以内のものが多数であった。設置後しばらくの間起るといわれる新奇効果（novelty effect）の時期はすぎていたにしても，いまからふり返ってみればテレビの目新しさは否定できない。ことに，当時の親はテレビの教育的益として知識源としての機能を最も重視していた（前回調査）。いまはテレビの存在はまったくあたりまえの事実である。知識源としてのテレビの機能（この場合，よい意味での）をあまり感じなくなったということはないであろうか。

c　テレビに対する批判力が増したこと。

bでのべたことと関連するが，今回の回答をした親は，早ければ小学校上級生のころから，おそくとも20歳のころからテレビの中で生活してきたものが大多数である。その中でテレビに対する冷静な批判力が養われてきたということも考えられる。

d　テレビ視聴に対するコントロールのゆるさ。

前回の調査で，テレビの害について親がどうみているかの質問をしたところ，小学生の親では，内容的には，〝大人の世界を示しすぎる〟〝刺激が強すぎる〟といったものが多くあげられ，一方，テレビ視聴行動そのものの悪影響として，生活時間・生活習慣への影響が多く指摘された。これらはいずれも，親の子どもに対する視聴コントロールによって最小限にとどめることができる筈のものだが，昨今の親の子どもに対する〝しつけ〟にゆるさが出てきているとすれば，悪影響は大きくなろう。つまり，親が，自分の子どもの視聴に対する教育的なコントロールをしないまま，テレビの害のみを認めているのではないか，ということである。

なお，前回では有意ではないものの階層ⅠがⅡより，ⅡがⅢより好意度が高い傾向があったが，今回の結果ではその差はみられなかった。

3）遊びか勉強か

小学校低学年の子どもの生活について，遊びと勉強を二者択一的に並べてどちらを重視するかを問うた。

小学校低学年の子どもの遊びについて2つの意見があります。あなたのご意見に近いほうに○をおつけください。

(1)　遊びは子どもの生活の中心であるから，子どもの遊びたいだけ遊ばせてやるのがよい。

(2)　子どもの将来のことを考えると，今のうちから，少し遊びを制限してでも勉強させた方がよい。

表Ⅲ－3にみられるように70％強の親が「遊び重視」に賛成している。地域差はないが，階層差がある。すなわち，階層ⅡはⅠおよびⅢに比して「勉強」型が多い。

70%強という数字をどう評価すべきか。現代の親たちも，勉強より遊びをと考えているとみるべきか。この数字の最も大きな背景は〝小学校低学年の子ども〟という

表Ⅲ－3　遊び観

	遊び	勉強	無答
Ⅰ	74.8 %	25.2	—
Ⅱ	66.8	33.2	—
Ⅲ	76.4	23.6	—
計	73.1	26.9	—
全	71.3	25.4	3.3

前提であろう。たしかに，質問文に明示してあるにもかかわらず〝今のうちは〟〝小さい間は〟と念を押した上で(1)に賛成した回答もかなりあった。それにしても(2)の25%強という数字も，一年生の親の意見としては決して小さな数ではない。2つの選択肢の表現の差異から考えるとむしろ多いといってよいかもしれない。なお，子どもの性のちがいによる親の意見の差はみられなかった。

4) 子どもの遊びをどう見るか

親たちはいまの子どもたちの遊びについてどのように見ているかを2つの面からたずねた。その一つは遊びの工夫について，いま一つは遊びの量についてである。

「このごろの子どもは，以前にくらべて遊びの道具やおもちゃに恵まれすぎていて，遊びに工夫がたりない」という意見があります。あなたのお考えはどうですか。つぎの中から最も近いもの一つに○をおつけください。

(1) その通りだ，と思う。
(2) そういう面もあるが，一面では別の工夫が行なわれていると思う。
(3) むしろ，このごろの子どもの方がよく工夫していると思う。

最近の子どもたちの遊びが変質したことの一つの表われとして工夫の不足がしばしばあげられる。現代の遊具が一般にきわめて精巧化し特殊化していることは事実であろう。とすれば，そのことが，日常的な素材を使っての遊びにくらべて子どもの遊びに工夫の余地を少くし，遊びを制約していることも予想し得る。こういったことを親はどう見ているのか。

多少誘導尋問的であることは否めないが，40%ほどの人がそれを認めている。しかし，その一面で別の工夫が行なわれているとする見方の方が多い。ことに階層Ⅰではそうである（階層ⅠとⅡ，Ⅲの間に有意差）。高学歴者の多い階層Ⅰの人びとが〝このごろの子どもは……〟というステレオタイプで一面的な見方を否定したものと思われるが，それにしても多数の人びとが，遊びの工夫が不足している面を認めていることが示された。

表Ⅲ－4　遊びの工夫

	工夫不足	同じ	より工夫	無答
Ⅰ	32.2%	65.7	2.1	—
Ⅱ	44.0	54.1	1.9	—
Ⅲ	46.5	48.2	5.3	—
計	40.0	56.9	3.1	—
全	38.6	55.4	5.5	0.5

つぎの質問は遊びの量についてである。

「このごろの子ども（小学生一般）は，安心して遊ぶ場所がなかったり，勉強に追われたりして，遊びをうばわれている」という意見があります。あなたのお考えはどうですか。

(1) その通りだ。もっと遊ばせてやりたい。
(2) いわれるほどでもない。子どもなりに十分遊んでいると思う。
(3) むしろ遊びすぎているくらいだと思う。

上の質問に関連し，お宅のお子さまの遊びについてどうお考えですか。

(1) もっと遊ばせてやりたい。
(2) 子どもなりに十分遊んで多ると思う。
(3) むしろ遊びすぎているくらいだと思う。

遊びの量は地域によって大きな差があるので，この項目は全調査対象についての地域別の数字で見てみよう（表Ⅲ－5）。

まず，子ども一般につ多ての質問であるが，約40%の人が子どもたちが十分に遊べていないとみている。後でのべるように，これは子どもたちの遊び時間が減っているという現実の反映といってよいであろう。面白いのは地域差で，工業地域に住む人びとは他の地域にくらべて，遊び不足論に賛成する割合が少い（有意差）が，これも後で見るように，工業地域の子どもたちの戸外遊び

表Ⅲ－5　遊びの量（一般）

	遊び不足	子どもなりに	遊びすぎ	無答
商	39.2%	56.0	4.4	0.5
住	40.5	55.8	3.4	0.4
工	32.1	61.2	6.1	0.5
全	37.5	57.5	4.5	0.4

工と他地域との間に有意差

表Ⅲ－6　遊びの量（自分の子）

	男子			女子		
	もっと	ほどほど	遊びすぎ	もっと	ほどほど	遊びすぎ
商	24.1%	68.2	7.7	31.9	61.8	6.3
住	26.7	62.1	11.2	29.6	64.4	6.0
工	19.9	67.0	13.1	26.5	64.5	9.0
全	24.0	65.0	11.0	29.1	63.8	7.1

男子全体と女子全体との間に有意差（1%）
工と商，工と住の間に有意差（5%）

の時間が他の地域よりも多いことに対応しているものと思われる（この地域が他の地域より遊び場に恵まれているわけではない）。

つぎに，自分の子どもについての意見である。これは男子と女子で異るので性別に結果を示した（表Ⅲ－６）。

前問にくらべて〝もっと遊ばせてやりたい〟という選択肢が少い。前問が小学生一般を対象とし，この問いが小学校一年生の自分の子どもという対象となる年齢の差はあるにしても，親は自分の子どもの遊びに対していく分冷淡なのではないか。つまり，大いに遊ぶことについて総論賛成，各論反対というような傾向があるようだ。

女子の親が男子の親に比べて〝もっと遊ばせてやりたい〟意見が多い（有意）ことは，女の子の戸外遊びの時間が少いことに対応している。女子の遊び時間の少なさをこの質問との関連で考えてみると，女子は遊び場条件の悪さの制約を直接的にこうむる傾向が男子に比べて強い（男子が条件の悪さを何とか打開することが多いのに対して）のかもしれない。

この質問における地域差も，各地域での現実の遊び時間の差に対応している。

なお，この質問への回答と，前出の「遊びか勉強か」への回答とに関連があることが予想された（遊び重視→もっと遊ばせてやりたい）ので両項目をクロスさせてみたが，両者はまったく独立であった。すなわち，子どもが十分遊んでいるか，もっと遊ばせてやりたいかの意見は，遊びを重視するかどうかという態度とは関係がない。

2　遊び場の状況

親の回答を通して子どもたちの遊び場の現状を探る。

1）遊び場充足状況

この質問はこの後のさまざまな分析の一つのkeyとなる重要な項目である。回答は遊び場の充足状況を親がどう認知しているかによるのであるが，この後で行なう分析では，親の認知というよりも現実の遊び場の状況を示すものとして扱っている。

お宅の近くには，お子さまが安心して遊ぶのに適当な場所がありますか。

(1)　十分にある。

(2)　十分とはいえないが一応はある。

(3)　ほとんどない。

この回答を規定する最大の要因はいうまでもなく居住地域の特徴である。それは商業，住宅，工業という大まかな地域分類で律せられるものでなく，学区ごと，さらにはもっと狭い範囲の地域，極端にいえば一人一人の子どもの住居の周囲の状況を考慮しなければならない性質のものである。しかし，ここではそこまで細かい状況をつかんでいないので，商・住・工の地域別に全体集計の結果を示すことにする（表Ⅲ－７）。

表Ⅲ－７　遊び場充足度

	十分ある	一応ある	ない
商	5.3%	67.3	27.4
住	12.4	66.0	21.6
工	6.8	65.9	27.3
計	8.9	66.3	24.8
男	7.5	68.6	23.9
女	10.4	64.0	25.7

遊ぶための適当な場所が十分にある，とするのは10%に満たず，ほとんどないというものが25%に達する。遊ぶ場所の不足はおおうべくもない。しかも，この回答は小学校一年生の親によるものである。低学年ではその遊びかたが幼児期のそれを脱していないためもあって，型どおりの狭い公園でもあれば，それは〝十分とはいえないが一応はある〟と解される傾向がある。中学年や高学年の子どもにとっては事態はいっそう劣悪であることが容易に想像される。

さきほどものべたように，遊び場状況は地域の中の学区によって（同一学区の中でも地区によって）異ることが考えられるので，学校別にいくつかの例をみてみよう。

商業，住宅，工業各地域の調査校の中から，それぞれ遊び場に最も恵まれている学校と恵まれない学校を一校ずつ挙げるとつぎのようである。

		十分	一応	なし
商業地域	A校	12%	65	22
	N校	4	33	63
住宅地域	S校	31	61	7
	T校	8	61	31
工業地域	G校	24	69	7
	H校	4	50	46

商業地域のA校は浅草繁華街の中にある。遊び場に恵まれた地区とはとてもいえないが，これでも商業地域の調査対象校10校の中では最もましなのである。それは近くに浅草寺（境内）のほか，隅田川ぞいに１，２の公園があることによる。一方，N校は上野地区の商店（問屋）街にあり，A校との直線距離は約2.3 kmである。今回の調査校32校中でも最も遊び場環境に恵まれないところにある。筆者の調べた限りでは，学校周辺にはまともな

公園はおろか，小さな空地すらない。裏通りの自動車交通量も多く，〝遊び場がほとんどない〟63%もうなづける環境である。

住宅地域のS校は，周辺にまだ畑が残っており，空地もある。公園も，サイクリングのためのコースもあって，都区内でもおそらく最も恵まれた地域の一つといってよいだろう。一方のT校はS校から直線距離で約1.7km。数年前までは近くに野原や，会社のグラウンドなどが多かったが，ここ数年のうちに，環状幹線道路が走り，建物も混んですっかり条件が悪くなってしまった。

工業地域のG校はひとくちにいえば小工業地区にある。遊び場環境に恵まれているとはいえないが，近所に広々とした公園があって救われている。この中にはローラースケート場があったり，船の残骸がおいてあったりして子どもたちに利用されている。H校は大工場群にかこまれ，工場と航空機（空港に近い）騒音の中にある。どこといって遊び場らしいものはなく，僅かに貧弱な公園があるのみである。G校とH校間の距離は約1.5kmである。

なお，各地域を通して男子の方が充足度が低いという傾向があるが，これは遊び場の必要度の性差，つまり男子の方がその活動範囲の広さなどから，十分な遊び場をより必要としていることの反映かと考えられる。

2）遊び場の種類

子どもたちが戸外のどのような所で遊んでいるかを自由記述してもらった。

お子さまはふだん戸外で遊ぶとき，どんな所で遊んでいらっしゃいますか。できるだけ具体的にお書きください。

記入された遊びの場所をその表現にもとづいてつぎのように分類した。

1. 公園（公園，遊園地，子ども広場など）
2. 団地（住宅団地内の庭，遊び場。団地内と明記してあれば公園，遊園地もこの中に含ませる。社宅，マンションの庭）
3. 境内（神社，寺院の境内。まれに教会の庭）
4. 空地（材木置場なども含む。まれに野原，畑）
5. 土手（主に工業地域の多摩川下流の土手）
6. その他（林，サイクリングコース，会社や大学のグラウンドなど）
7. 自宅庭
8. 友人庭（友人宅の庭，近所の庭）
9. 校庭（校庭開放日の校庭）
10. 園庭（幼稚園，保育所などの庭）
11. 児童館（学童保育の児童館の庭など）
12. 道路（道路，歩道，路地。歩行者や子どもに開放された道路を含む）
13. 周辺（家のまわりと記入されたもの。玄関先や家のまわりの道路などが含まれるようである）
14. 駐車場（駐車場，車庫）
15. 屋上（自宅のビル，マンションなどの屋上）

以上の分類による遊びの場所15種をさらに大きく3つにまとめ，仮りに第一類，第二類，第三類と名づける。

第一類：カテゴリーの1から6まで。遊びを目的とし，あるいは遊びを想定して作られた施設，および一般に子どもたちの遊び場として適当と考えられる場所。

第二類：カテゴリーの7から11まで。庭と名のつくもの。適当な遊び場になり得るがいろいろな制約や条件のある場所

第三類：一般的にいって他の用途に供せられるためのスペースで，遊び場としては不適当なところ。カテゴリー12から15まで。

上記の2段階に亘る分類にはいずれもできるだけ実質的な意味もたせようとしたが，実際の作業にあたっては形式的な分類にとどまらざるを得ない面もあった。たとえば，公園といっても広々として子どもたちの創造的な遊びを刺激するような理想的なものから，100m² に満たない小さな空地に型どおりブランコ，すべり台をおいたものまでさまざまであり，記入された簡単なことばの中からこれらの区別をするのはほとんど不可能である。

しかし，これらの前提をおいた上でも，子どもたちの遊び場の状況についていろいろな情報を与えてくれる。

前述のように遊び場状況は隣り合った地区で事情がまったく異っても不思議はないのだが，全体の状況を概観するために，商・住・工の地域別にまとめてみることにする。（表Ⅲ－8）

概していえることは，公園と道路が各地域に共通して多く，他の種類の場所は地域の特徴がはっきり出ているという点である。

商業地域はこの場合すべて台東区だが，同区には小さな公園が比較的多くある。「公園」の問題点については後で触れるが，ともかく68%という数字に示されるように公園への依存が高い。そのほかでは，谷中の寺町など地域的に偏りのある「境内」を除けば道路しかない。経済活動が盛んで土地が高度に利用されている土地柄だけに子どもの入りこむ余地はないかのようである。前節でとりあげたN小学校の，公園52%，道路67%，屋上7

表Ⅲ－8　遊び場の種類（地域別）

		商			住			工			計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
第一類	公園	71%	64	68	49	43	46	43	43	43	52.4**	48.1	50.3
	団地	1	1	1	20	18	19	13	10	12	13.6*	11.3	12.5
	境内	13	8	11	5	5	5	13	9	11	9.5	6.8	8.1
	空地	3	4	4	17	12	15	9	10	10	11.5	9.2	10.4
	土手	0	0	0	0.4	0.4	0.4	7	4	5	2.4	1.3	1.8
	その他	0	0	0	3	2	3	0.2	0.2	0.2	1.4	1.0	1.2
第二類	自宅庭	4	2	3	17	21	19	8	10	9	11.2	13.2	12.2
	友人庭	6	5	6	6	7	7	7	8	8	6.5	7.2	6.8
	校庭	5	5	5	6	7	6	5	9	7	5.4	7.2	6.3
	園庭	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1.1	1.4	1.3
	児童館	2	1	1	1	2	2	1	1	1	1.4	1.4	1.4
第三類	道路	41	44	43	36	33	34	30	28	29	35.2	33.8	34.5
	周辺	4	6	5	4	3	3	8	8	8	5.0	5.5	5.3
	駐車場	4	4	4	5	5	5	6	5	5	4.8	4.7	4.8
	屋上	2	3	2	2	3	3	1	1	1	1.6	2.4	2.0
無答		8	10	9	7	7	7	13	13	13	8.9	9.6	9.3
N		443	429	872	831	802	1,633	551	604	1,155	1,825	1,835	3,660
平均回答数		1.59	1.47	1.53	1.73	1.64	1.68	1.52	1.48	1.50	1.63**	1.55	1.59

自由記述であり，一人の子どもの遊ぶ場所は一か所とは限らないから合計は100%を越す。
** ($p<0.01$)　* ($p<0.05$) は性差

%，駐車場4%という数字がこの地域の状況を象徴している。

住宅地域のばあいは四つの区にわたっているだけにいっそう地区による差が大きいが，商業地域にくらべれば恵まれた状況を示している。ここでも商業地域ほどではないにしても公園と道路が大きな比重をしめているが，そのほかに，地区によって住宅団地，空地，それに自宅に庭のある家が多くなるため，これらのスペースが選ばれることになる。

工業地域でも公園と道路が1，2位である。ただ，工業地帯の表通りは産業道路の様相を呈しているためか，住宅地域にくらべても道路比率がやや低い。この地域では神社や寺院の境内が割合に多く，また，とくに雑然としてはいるが未利用の空地が選ばれている。地区によっては多摩川の土手が（危険はあるが）格好の遊び場となっている。そのほか，文脈からは少し外れるが，自宅庭と友人庭の差がほとんどなく，このことは住宅地における差の大きさと比較してみると地域性をよく表わしているようで興味深い。

全体として記入された遊び場数は男の子の親の方が多く，公園，団地を挙げたものもその傾向がある。男子の方が女子よりいろいろな場所に遊び場を求めるものと考えられる。そのほか遊び場の種類にも，統計的には有意ではないが男女の差がうかがわれる。すなわち，女子は男子にくらべて自宅およびその周辺，馴れ親しんでいる場所が多く，男子は遠征型，開拓型が多いように思われる。

3）遊び場充足状況と子どもの遊び量の認知との関係

自分の子どもが十分に遊んでいると考えるか，もっと遊ばせてやりたいと考えるかは，自宅周辺の遊び場の充足状況に深く関わっているものと想像される。そこで両項目の関係をみるために，商・住・工各地域から3校ず

表Ⅲ－9　遊び場充足度×遊びの量（自分の子）

充足度＼遊び量	もっと	ほどほど	遊びすぎ	
十分ある	2	42	13	57
一応ある	168	473	58	699
ほとんどない	177	154	13	344
	347	669	84	1,100

つを選びクロスさせた。結果は表Ⅲ－9で，男女，地域を通じて類似した傾向なのでまとめて示してある。

検定を求めるまでもなく両項目が深く関連していることが明らかであり，親の切実な気持が反映している。

4） 遊び場充足状況と遊び場種類の関係

前2問の関係，すなわち，遊び場として適当な場所があるか否かの認知と，実際に遊んでいる場所の関係を見る。

a　遊び場の種類ごとに，それぞれの場所をあげた人々の遊び場充足度の認知を示したものが表Ⅲ－10である。たとえば子どもの日常の遊び場として「公園」をあげた人のうち，その前の問いで遊び場が「十分にある」と答えたものが9.7%，「一応ある」が76.7%，「ほとんどない」が13.6%いたことを意味する。二つあるいはそれ以上の種類の遊び場をあげたばあいには，充足度の認知も2回あるいはそれ以上にわたって別々に計算した。したがって，たとえば「公園」の充足状況が，実は同時にあげられた「団地」によってもたらされたものであり得ることをあらかじめことわっておく。

主要な遊び場について見て行くと，まず，公園と団地の差が目につく。すなわち，公園では「十分」が9.7%，「まったくない」が13.6%であるのに対して，団地ではそれぞれ22.3%，7.2%である。団地がこの年齢段階の子どもたちにとって比較的恵まれた遊び場であるのに対して，公園は「十分」と感じられることが少く，むしろ「まったくない」方が多いほどである。公園は遊び場としてあげられることが最も多く(各地域に多くある)，しかも一般的な通念としては小学校一年生程度の段階の子どもにとっては適当な遊び場と考えられがちであるにもかかわらず，それが遊び場として質的にもよいとはいえないことを示唆するものである。

神社や寺院の境内はかつては子どもの格好の遊び場であった。それにしては「十分」6.0%は意外ともいえるほど低い数字である。回答に付せられたコメントや寺社の現状に照らすと，これにはいくつかの原因が考えられる。境内にマンションなどが建てられて狭くなった，駐車場に利用されることも多くなっている，また一方では，痴漢らしきものが出没して危険だ，などで，要するに寺社の境内も子どもたちの世界から遠ざけられる情勢にある。

河川の土手，河原は事故の危険がつきまとうが，土地の起状や地形の変化は子どもにとって魅力的である。工業地区のR校のばあい，多摩川の河原に近いため，全体の31%が遊び場としてこれをあげ，その中の32%が遊び場が「十分」，68%が「一応」あるとして，「ほとんどない」は皆無であった。これは他のどの学校，どの遊び場にもみられない稀少な例である。

表Ⅲ－10　遊び場種類別充足度

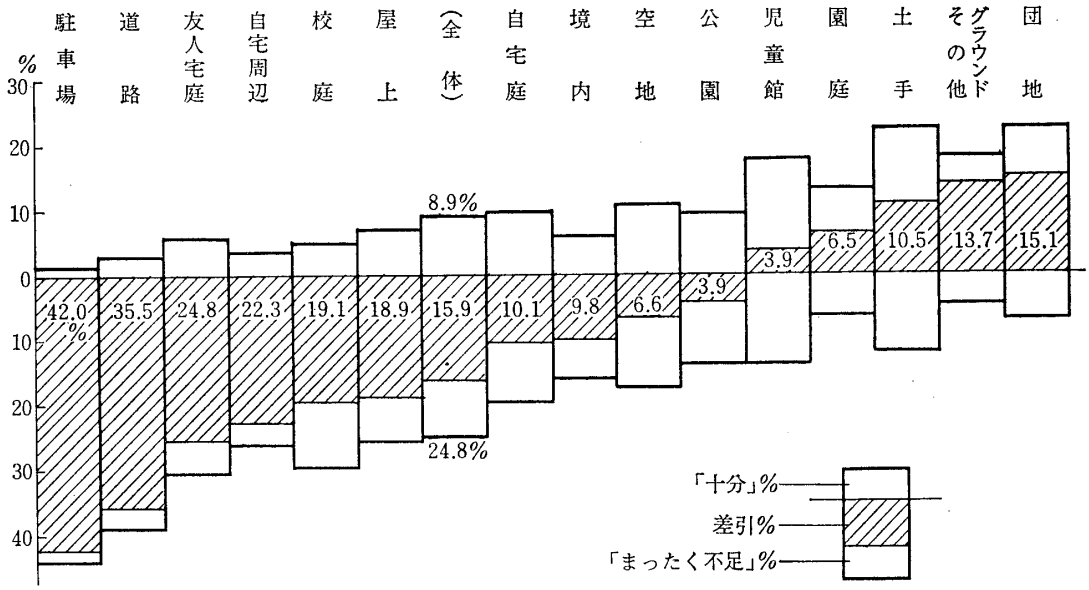
種類＼充足度	十分	一応	なし
公園	9.7%	76.7	13.6
団地	22.3	70.5	7.2
境内	6.0	78.2	15.8
空地	10.6	72.2	17.2
土手	22.4	65.7	11.9
その他	18.2	77.3	4.5
自宅庭	9.4	71.1	19.5
友人庭	5.6	64.0	30.4
校庭	5.2	70.5	24.3
園庭	13.0	80.5	6.5
児童館	17.6	68.7	13.7
道路	3.0	58.5	38.5
周辺	3.6	70.5	25.9
駐車場	1.7	54.6	43.7
屋上	6.8	67.5	25.7
無答	6.8	56.0	37.2
全体	8.9	66.3	24.8

道路や駐車場を遊び場とする場合の遊び場状況の悪さ(遊び場が「ほとんどない」がそれぞれ38.5%，43.7%，「十分にある」はわずかに3.0%と1.7%）は当然であるが，京浜第一国道の車道でローラースケートをして遊ぶ子どもの姿は，「危ないからやめなさい」では済まされないものを感じさせる。

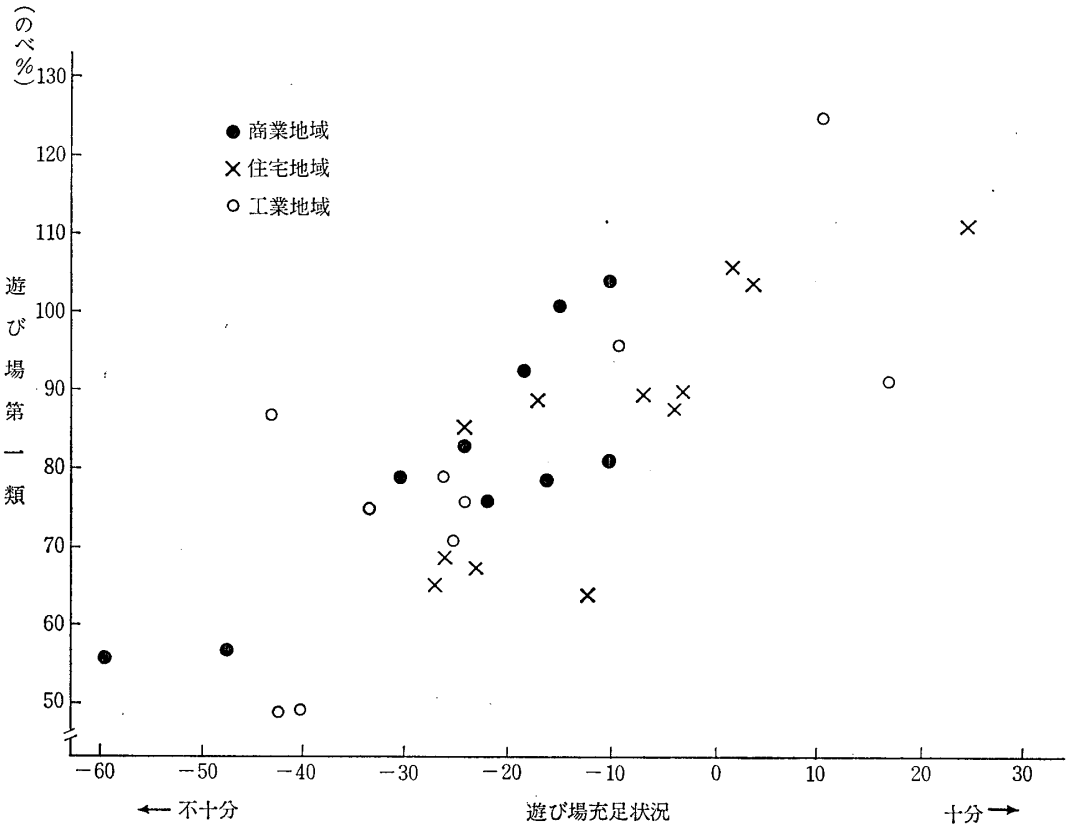
図Ⅲ－1は各遊び場をあげたものについての遊び場状況を「十分」と「ほとんどない」の二つの選択肢のパーセンテージの対比で示したものである。大まかにいって，左端に記されている駐車場が最も条件が悪く，右端の団地が相対的に最も恵まれた遊び場であるというように理解してよいだろう。

b　つぎに地区（学校）を単位として，遊び場充足状況と，遊び場の種類との関係をみるために，少し目の粗い方法であることを免れないが，つぎのような分析を試みた。

図Ⅲ－2は，横軸に地域の遊び場充足状況を示す指標として便宜的に（遊び場が）「十分にある」%から「ほとんどない」%を減じた数値をとり，縦軸には遊び場第一類（前述）に分類される公園，団地，境内などの場所の延べ数（実際には遊び場第一類に属する遊び場は一人あたり2種類までが大部分である）のパーセンテージを

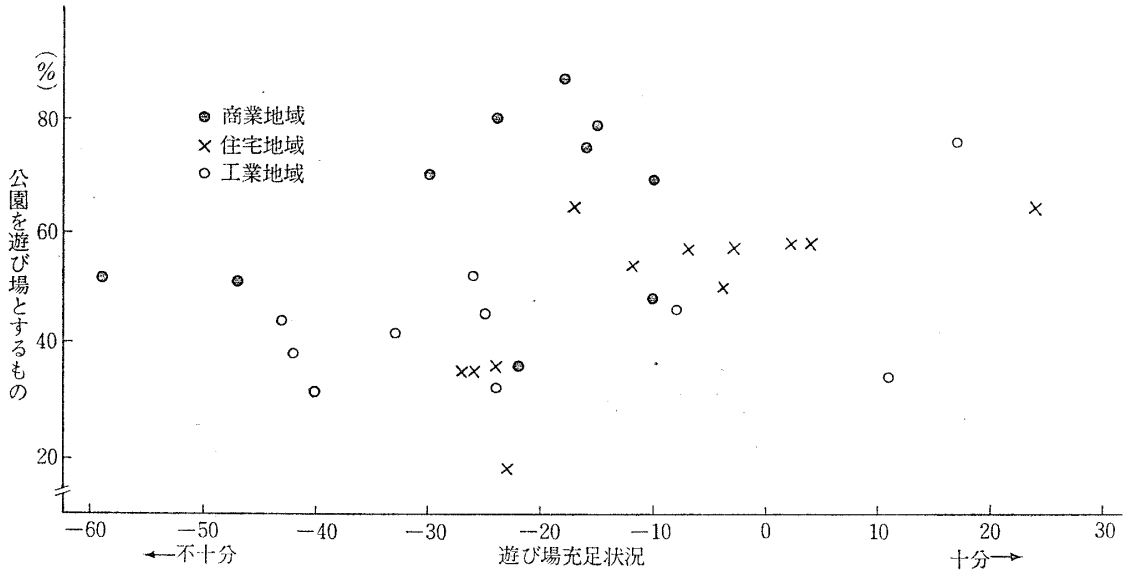


図Ⅲ－1　遊び場種類別充足度



図Ⅲ－2　遊び場充足度と遊び場第一類

とったものである。のべ数をとったのは，一つ一つの場所では不十分でも，いくつかの場所を総合して評価したときに，遊び場が「十分ある」または「一応はある」と判断されることもあり得るからである。二つの指標間には図のようにきわめてはっきりした関係がみられる。試みに相関係数を求めると r＝.80 となる。また，遊び場第一類の中から公園だけをとり出して上と同じような相関図を描いてみたものが図Ⅲ－3であり，その相関係数



図Ⅲ−3　遊び場充足度と公園

はr＝.29である。

さて，以上のような結果をもとに，子どもの遊び場の現状についてつぎのようなことが考えられる。

一般に，子ども，とくに低年齢の子どもにとって，公園，遊園地は格好の場と考えられ勝ちである。しかし，この調査結果と，筆者が調査地区を実際に歩いて調べたことから来る公園，遊び場の特徴は総じて「遠い」「狭い」「冷たい」ということばに集約できる。

遠い，ということは別の面からいえば，数の不足を意味する。いうまでもなく，子どもにとって遊びは日常のものである。その日常性が満たされるためには日常の生活圏の中にその条件が備わっていなければならない。遊び場環境についていえば，子どもたちの家庭あるいは学校のすぐ近くに利用できる場所がなければならないわけである。どんなに立派な，理想的な遊び場を作ったとしても，それが子どもにとって「遠い」存在であれば実質的には無意味である。距離の遠さだけでなく，そこに行くのに車の往来の激しい道路を渡らねばならないとしたら，親は安心して遊びに出せないであろう。地図上からはそれほど遠くない距離にありながら遊び場環境では大きな差のある前述（Ⅲ.2.1）参照）の例は「日常性」の重要さを示すものである。

狭い，ことについてはいうまでもあるまい。経済的な効率，生産性が重視される社会では，直接的には何も産み出さない，ムダなスペースである子どもの遊び場が優遇される期待は薄い。

冷たい，は物理的な冷たさと精神的な冷たさの両方を意味する。高速道路の下に遊び場がある。官公庁の統計ではそれは立派に公園の面積の中に算えられるであろう。しかし，この調査の行なわれた3月上旬のその「公園」はまったく寒々としていた。陽が当らないだけではなく，地面のコンクリートも，きまりきったようにあるブランコとすべり台も，公園を作ったという形式的な実績のみを重んずる結果であるように思われ，ほんとうに子どものためにという配慮が感じられないのである。

Ⅳ　子どもの生活時間の構成

本研究の中心的関心である生活時間についての検討に入る。

この章ではまず子どもの生活を構成する各行動ごとの時間を概観し，つぎに1962年の結果との比較を行なう。

1　各行動にあてられた時間

1）　行動ごとの概観

各行動ごとの平均時間および主要な行動時間の標準偏差は表Ⅳ−1，Ⅳ−2である。時間の分布がさまざまであり，平均時間が代表値としての意味をもたないものもあることをまずことわっておく。

行動時間分布の型は大まかにいって4種類に分けられる。すなわち，

(1)　山型（正規分布に比較的近いもの）……睡眠，日常習慣，学校，テレビ視聴

(2)　行動時間ゼロが多く，短時間のものが少しあり，長時間のものはほとんどないもの（ポアソン分布型）……勉強，読書，レッスン，その他，不特定

表Ⅳ－1　生活時間の構成(1) 日曜日（単位：分，カッコ内標準偏差）

性	サンプル種別	地域階層	睡眠	日常習慣	勉強	読書	テレビ	室内遊び	戸外遊び	外出	レッスン	その他	不特定	合計
男子	全体	商	680	167	26	38	161	105	148	98	7	14	73	1,517
		住	675	152	27	40	127	102	131	128	12	25	69	1,498
		工	665	167	26	32	163	113	160	102	5	24	65	1,522
		計	673 (50)	164 (53)	27 (34)	37 (46)	143 (79)	105 (95)	142 (121)	116 (156)	9	21	69	1,506
	サンプル	Ⅰ	672	166	27	41	135	96	154	116	13	27	61	1,508
		Ⅱ	683	172	30	32	141	114	143	109	6	13	67	1,510
		Ⅲ	673	169	28	36	165	101	133	116	7	18	72	1,518
		計	676 (52)	169 (53)	28 (35)	**37 (45)	***146 (81)	*103 (93)	***144 (117)	***114 (156)	9	20	66	1,512
	1962年	Ⅰ	681	166	39	35	170	88	157	65	37		75	1,519
		Ⅱ	677	164	30	31	178	67	180	62	30		64	1,483
		Ⅲ	675	164	29	10	184	74	202	66	36		60	1,506
		計	679 (46)	165 (52)	34 (40)	28 (43)	176 (78)	80 (81)	174 (110)	65 (103)	35		69	1,505
女子	全体	商	685	166	21	30	164	107	103	138	14	18	64	1,510
		住	676	170	30	43	124	111	100	119	19	34	74	1,500
		工	673	165	25	26	162	104	119	149	10	21	67	1,521
		計	677 (52)	168 (57)	27 (34)	36 (46)	142 (85)	110 (106)	106 (108)	131 (163)	16	28	70	1,511
	サンプル	Ⅰ	678	167	28	43	123	103	109	134	21	22	64	1,492
		Ⅱ	686	170	23	31	158	115	120	108	8	30	52	1,512
		Ⅲ	677	167	30	33	152	124	102	132	13	22	69	1,521
		計	680 (53)	168 (57)	***27 (35)	37 (48)	***142 (81)	*113 (106)	*109 (114)	***127 (150)	15	24	65	1,507
	1962年	Ⅰ	679	171	42	40	162	82	135	85	61		48	1,505
		Ⅱ	692	161	38	24	164	93	120	71	36		86	1,485
		Ⅲ	681	164	37	17	182	106	150	65	20		86	1,508
		計	683 (48)	167 (50)	42 (30)	30 (43)	168 (76)	91 (86)	135 (100)	77 (107)	45		67	1,505

時間数の合計が60×24＝1,440分より多いのは重複行動を含むためである。
*　**　*** はそれぞれ1962年との比較で有意差あるもの。ただし「テレビ」はt検定(平均差)，その他は χ^2 検定による。
(* $p<0.05$　** $p<0.01$　*** $p<0.001$)

(3) 行動時間ゼロが最頻値で，他に1時間ないし2時間ほどの所にもう一つの山があるもの（図Ⅳ－1，Ⅳ－2参照）……室内遊び，戸外遊び

(4) 行動時間ゼロが多く，あとは短時間から長時間までにわたって幅広く分布するもの……日曜日の外出

以下では各行動ごとに，その行動時間の量，性差，地域差，階層差などをとりまとめて簡単にのべる。

a　睡　眠

調査当日の午前0時から起床時までと，夜の就寝時から午後12時までの時間の合計であるから，この数字は当日の連続した睡眠時間というわけではない。

平日の平均睡眠時間は約10時間20分で，ことに10時間と10時間半の間に約70%のものが含まれ，9時間半と11時間の間には95%近くのものが入る。時刻別の推移はここでの主題ではないが，夜7時すぎに就寝しているものは2%未満，8時すぎが14%だが，9時すぎには80%になる。つまり大多数の子どもが8時半から9時ごろの間に就寝し，7時ごろ起床する。

日曜日は朝の睡眠の長いのが特徴で，8時すぎには40%弱の者がまだ寝ており，それが関係して平均睡眠時間は11時間15分程度で，平日より1時間近く長い。個人差も平日より大きい（標準偏差：平日約30分，日曜日約50分）。

地域や階層の群間にも差はなく，就寝時刻の問題を別にして，睡眠時間そのものがとくに短かすぎたり，長すぎるというような傾向はみられない。

表Ⅳ－2　生活時間の構成(2) 平日（単位：分，カッコ内標準偏差）

性	サンプル種別	地域階層	睡眠	日常習慣	学校	勉強	読書	テレビ	室内遊び	戸外遊び	外出	レッスン	その他	不特定	合計
男子	全体	商	624	125	335	40	22	134	61	79	7	14	13	53	1,507
		住	620	119	321	39	23	110	64	85	9	21	17	53	1,481
		工	622	127	324	30	23	140	61	98	8	9	19	47	1,508
		計	621 (32)	122 (43)	325 (30)	37 (33)	23 (33)	123 (64)	63 (66)	86 (75)	8	17	17	52	1,494
	サンプル	Ⅰ	620	119	320	38	30	117	51	94	9	23	21	44	1,487
		Ⅱ	624	130	324	39	16	130	68	81	8	12	16	52	1,500
		Ⅲ	619	131	327	37	27	135	71	80	11	14	21	46	1,519
		計	***621 (32)	126 (43)	***323 (34)	***38 (33)	25 (34)	***126 (65)	62 (62)	***86 (77)	9	17	20	47	1,501
	1962年	Ⅰ	631	130	308	58	30	140	55	93	10	11		45	1,511
		Ⅱ	635	122	295	38	17	140	43	109	27	26		57	1,509
		Ⅲ	624	128	294	52	15	155	47	139	1	8		47	1,510
		計	630 (33)	127 (42)	301 (46)	52 (41)	23 (35)	144 (60)	50 (52)	109 (75)	12	14		49	1,510
女子	全体	商	621	130	330	42	20	125	72	54	9	27	15	57	1,502
		住	620	127	328	39	24	99	73	57	9	30	19	59	1,484
		工	619	135	321	32	19	141	68	62	18	12	19	52	1,503
		計	620 (32)	129 (42)	327 (31)	38 (36)	22 (30)	116 (67)	72 (69)	57 (65)	12	24	19	53	1,494
	サンプル	Ⅰ	618	132	327	35	26	93	93	57	13	38	13	43	1,488
		Ⅱ	619	131	336	43	17	122	66	57	10	31	15	43	1,490
		Ⅲ	620	137	325	39	23	132	77	72	6	16	18	47	1,512
		計	***619 (32)	133 (44)	***329 (31)	***38 (38)	23 (33)	***113 (65)	81 (69)	***62 (66)	10	29	15	44	1,497
	1962年	Ⅰ	641	128	310	56	28	120	65	69	10	32		51	1,510
		Ⅱ	638	129	303	55	17	125	107	54	5	15		62	1,510
		Ⅲ	639	117	302	59	17	147	61	92	17	21		32	1,504
		計	640 (37)	126 (42)	306 (55)	57 (34)	23 (36)	128 (48)	75 (69)	71 (67)	11	25		49	1,508

b　日常習慣

洗面のようにごく短い時間に終るものや，食事のように行動の開始と終了の時刻をはっきりさせにくいものを含み，記録のむずかしいカテゴリーである。日曜日の平均が2時間40～45分ぐらいで，平日は2時間強になっている。この差は，平日の昼食が学校での給食であるため，日常習慣としてはをカウントしなかったことが主な原因である。

c　学校生活

もちろん平日のみで，平均5時間半程度になっている。学校による差も大きくはない。

d　勉　強

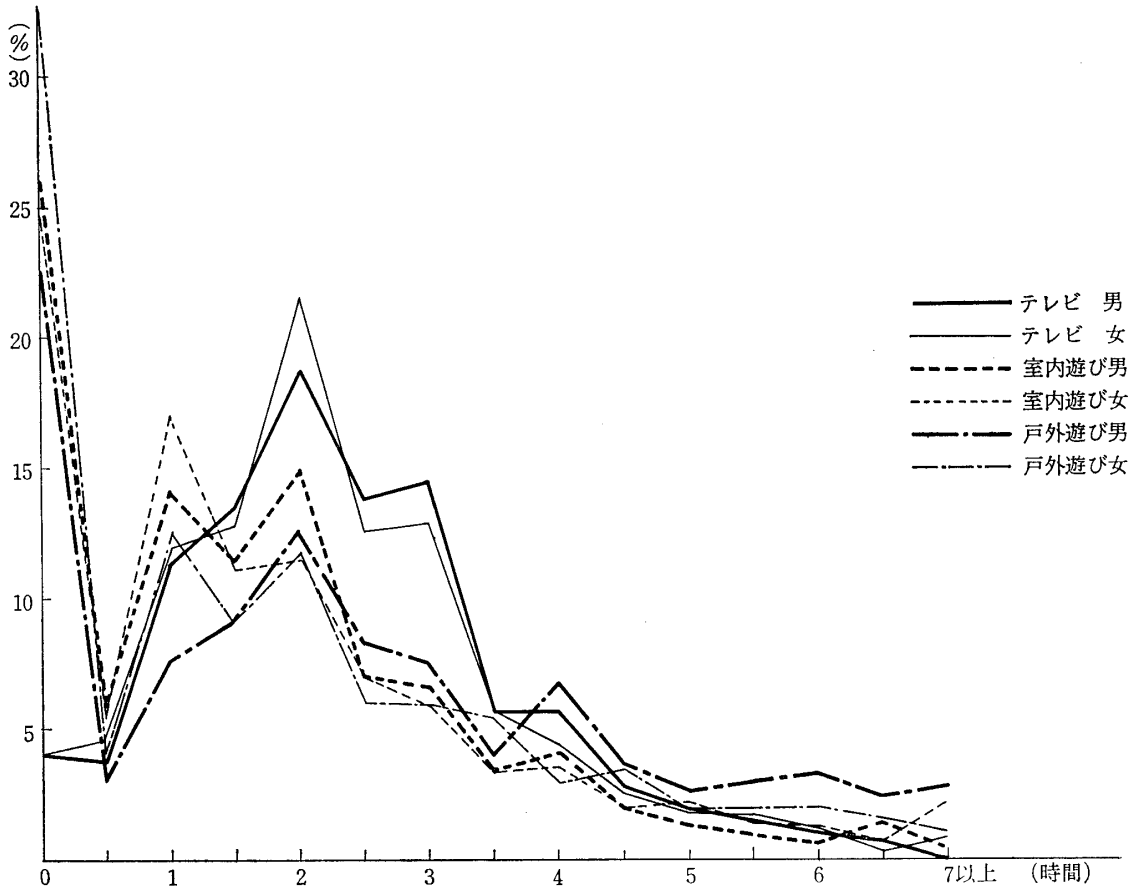
この行動を記録したものは日曜日43%，平日は65%ほどで，平均時間も平日の方が多い。勉強したものの大部分は30分から1時間で，それ以上のものは10%に満たない。3時間以上に及ぶものもごく少数だがみられた。

e　読　書

日曜日で約50%，平日で約40%がこの行動をしているが，この行動も時間数からいえばそれほど大きなものではない。勉強とは逆にこれは日曜日の方が多く，両行動を合わせると日曜・平日とも約1時間を占める。一個人での最長時間は5時間（日曜日）である。

f　テレビ視聴

いろいろな意味できわめて特徴的な行動といえる。両日とも95%以上の子どもがテレビ視聴をし，日曜日2時間20分，平日2時間と生活時間の中でも大きなウエイト



図Ⅳ－1　主要行動時間分布（日曜日，全体集計による）

をしめる（最も長時間視聴したものは日曜日に10時間以上に達している）。地域・階層の群間にはっきりした差がある。

まず，地域では日曜・平日とも商業地域，工業地域では住宅地域より視聴時間が多く，その差は日曜で34分から40分，平日では24分から42分に及んでいる（平均値の差の検定でいずれも有意）。商と工の間は平日女子で工＞商（$p<0.05$）のほかは差がない。

サンプル集計による階層別視聴時間では，階層Ⅰが共通して少く，Ⅱ，Ⅲと多くなる傾向がみられる。階層間に有意な差のみられるものはつぎのとおりである。

日曜　男子　Ⅲ＞Ⅰ（$p<0.01$）
　　Ⅲ＞Ⅱ（$p<0.05$）
　　女子　Ⅱ＞Ⅰ（$p<0.001$）
　　Ⅲ＞Ⅰ（$p<0.01$）
平日　男子　なし（Ⅲ＞Ⅰが$p<0.10$）
　　女子　Ⅱ＞Ⅰ（$p<0.01$）
　　Ⅲ＞Ⅰ（$p<0.001$）

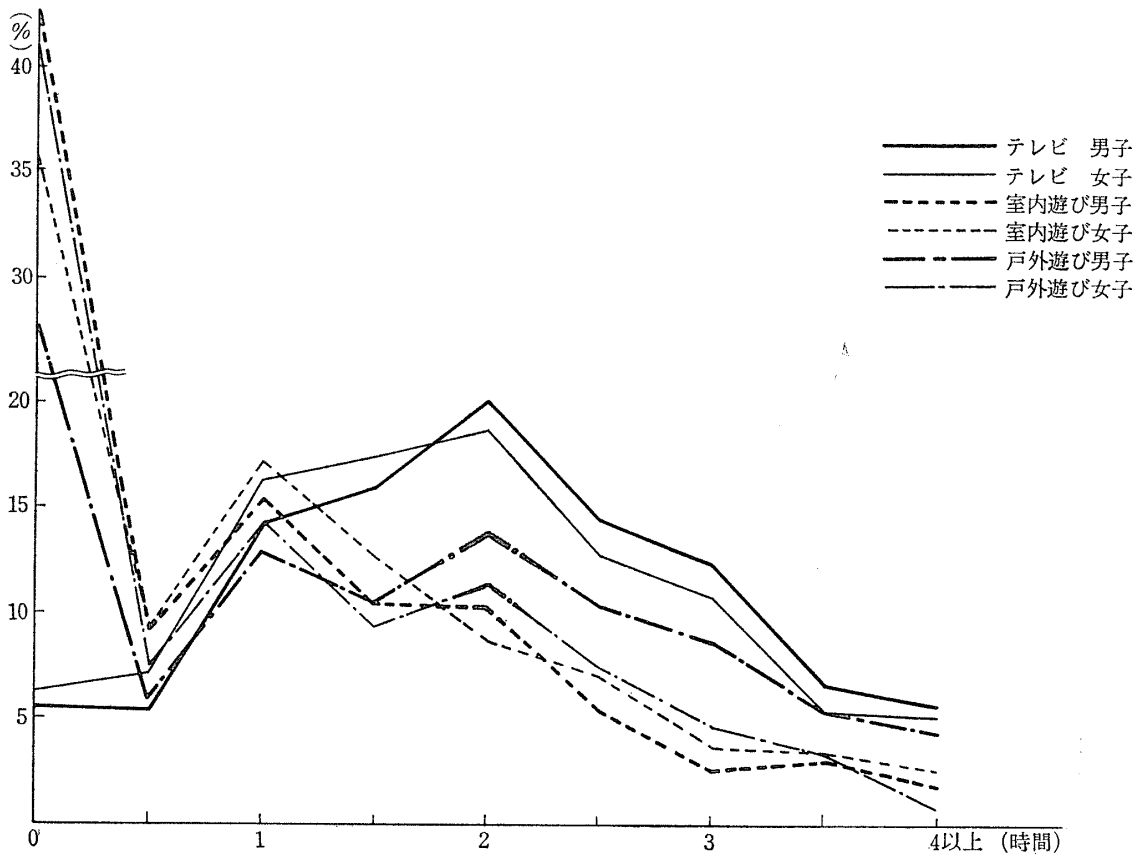
テレビ視聴時間に影響を与え，あるいはそれと影響を与えあう要因としては，外出・室内遊び・戸外遊びなどを中心とする他の生活時間，親のテレビ観，住居条件，さらには戸外遊び時間の一つの規定因となる遊び場の問題などさまざまなものが考えられるが，これらについては後に扱う。

g　室内遊び

室内遊びはその定義づけがむずかしい行動であるが，結果としては日曜日で約4分の3，平日で3分の2ほどの子どもがこれを行ない，平均行動時間はそれぞれ1時間40～50分および1時間強である。もっとも，行動時間の分布が偏っている（図Ⅳ－1，Ⅳ－2参照）ため，平均値の代表性は弱い。最頻値は両日とも0だが，それを除くと日曜日の男子は1時間と2時間に2つ山があり，日曜女子および平日男女とも1時間が最も多い。室内遊びをしたものの比率及び室内遊び時間の中央値はそれぞれつぎの通りになっている。

日曜日男子　75%（73%），87分（89分）
　　女子　75%（77%），96分（81分）
平日　男子　57%（60%），45分（43分）
　　女子　64%（71%），58分（69分）
（カッコ内はサンプル集計）

地域差はなく，階層の差は曜日と性によって異るが統計的に有意ではない（分布が偏るため時間を0，30～120



図Ⅳ－2　主要行動時間分布（平日，全体集計による）

分，それ以上のように3つに分けてχ^2検定。日曜日女子のⅠとⅢの間で最もその値が大きく，$p<0.10$であった)。性差は平日のみにみられた（$p<0.01$)。

室内遊びは戸外遊びとは排反的だが，テレビ視聴とは排反的な面と相関的な面（テレビ視聴と室内遊びは重複するばあいも多く，テレビを視聴することによって室内遊びが増し，あるいは室内遊びをすることによってテレビ視聴時間が増す）があるので，この行動量を決定する要因はテレビ視聴量のばあいと同様に複雑である。

h　戸外遊び

男女で大きな差のある行動である。それぞれの曜日で戸外遊びをしたものの比率および戸外遊び時間の中央値を示すと，

日曜日	男子	77%（79%)，	122分（125分)
	女子	66%（68%)，	78分（75分)
平　日	男子	72%（70%)，	77分（75分)
	女子	59%（58%)，	47分（46分)

（カッコ内はサンプル集計）

となる。この量の評価については後に詳細にのべるとして，ここでは性差及び地域差，階層差についてみておく。

性差は明らかで，日曜日には平均値で36分，中央値で45分，平日でも平均で24分，中央値で30分（いずれも全体集計）という大差がある。

地域による差異は，工業地域が商・住地域より多いのが目立つ。しかし，室内遊びの場合と同じく，戸外遊び量0，30～120分，それ以上の3つに分けてχ^2検定した結果，有意に差のみられたものは

日曜日　男子　工>商（$p<0.05$)

平　日　男子　工>住（$p<0.05$)

の2つの関係だけであった。

階層による差異は，男子の場合階層Ⅰが多く，女子では平日はⅢ，日曜日はⅡが多いというようにまちまちの傾向がみられるが，いずれも有意な差ではない。ただ，戸外遊びをしたものの比率の差を検定すると

日曜日　男子　Ⅰ(85.1%)>Ⅲ(73.9%)　($p<0.05$)

平　日　女子　Ⅲ(66.3%)>Ⅰ(51.3%)　($p<0.05$)

の2つが有意差を示す。しかし，曜日のちがいこそあれ，階層の関係が男女で逆になっていたり，女子の場合は曜日によって異ったりしていて解釈が困難である。

i　外　出

平日はとるにたらぬ数字であるが日曜日には外出した

もの約50%，平均時間で約2時間という大きさを示している。さきにも触れたが，使用可能な資料を選ぶ段階で外出時間の極端に多いもの（およそ8時間以上）は，その段階で気づく限り除外した（その作業は目分量で行なったため結果的には完全でない）ので，実際の外出率，外出時間はもっと多いことになる。

外出は他の行動より優先し（たとえば，外出するため戸外遊びができないことはあっても，戸外遊びをするために外出をとりやめることは少い），他の行動と排反的（外出先でテレビを視聴したり遊んだりすることはあり得るが，ここではそこまで追跡していない）な関係にあるため，生活時間全体に大きな影響を与えていることが予想される。

j　レッスン

時間としては多くないので，この行動をしたもののパーセンテージをあげておく。

		商	住	工	計
日曜日	男子	8%	13	5	10
	女子	15	29	14	22
平　日	男子	21	26	13	22
	女子	34	43	17	34

		I	II	III	計
日曜日	男子	13	8	7	10
	女子	31	17	12	21
平　日	男子	26	15	16	20
	女子	44	40	27	38

女子，住宅地域，階層Iが多く，男子，工業地域，階層IIIが少い。

k　その他，不特定行動

特記するまでもあるまい。

2）　中心的行動時間

以上，一日の生活時間について各行動ごとに概観してきた。それぞれの行動をしたものの比率および費した時間，さらには各行動の心理的重要性からみて，子どもの生活の中で中心的とみられる行動とそれほどでもない行動とに分けるならば，睡眠，日常習慣，テレビ視聴，室内遊び，戸外遊び，それに日曜日の外出と平日の学校生活を前者としてあげることができるだろう（もちろん個人特有の，あるいは日によって特殊の重要性をもつ行動——たとえばある子どもは一日に3時間以上レッスンをしている——を無視することはできぬが）。その中で，睡眠および日常習慣は不可欠の行動であり，学校生活は大部分子どもの意思や居住環境，家庭環境に関わらない行動であってみれば，生活時間の構成の問題としてはとくにテレビ視聴，室内遊び，戸外遊びおよび日曜日の外出が注目されることになる。

いま，主要行動時間の間の相関を求めると表IV—3の通りである。時間分布の偏った行動がある（室内遊び，戸外遊び，外出）ので相関係数の意味に限定をおかねばならないが，つぎのようなことがわかる。

これらの諸行動は一般的には排反的だが，中には相互にプラスに働きあう行動（ex. テレビと食事時間は重複しあい，一方が長びけば他方も長びくという面をもつ）もあり，また両方の関係を含むもの（ex. テレビ視聴と室内遊び）もあってさまざまだが，全体的には諸行動間の相関は低い。ことに正の相関は，あってもごく低いものである。これらの中で，日曜日の外出時間が他の諸行動に干渉的な効果を及ぼしていることがうかがわれる。とくに戸外遊びとの負相関が比較的高いのは両行動とも

表IV—3　中心的行動時間の間の相関

	睡眠		日常習慣		テレビ		室内遊び		戸外遊び		外出	
睡眠			−.11	−.10	−.12	.06	−.12	−.15	−.11	.01	−.03	−.26
日常習慣	−.02	−.17			.08	.04	.02	−.06	.12	.18	−.31	−.29
テレビ	−.22	−.10	−.03	.06			−.01	−.07	.01	−.01	−.31	−.19
室内遊び	−.02	−.05	−.09	−.14	.01	−.15			−.26	−.26	−.26	−.26
戸外遊び	−.03	.01	−.06	.02	−.01	.07	−.35	−.46			−.50	−.46
外出	−.05	.00	−.09	−.10	−.04	.02	−.06	−.08	−.21	−.16		
学校	−.09	−.08	.05	−.01	−.09	−.13	−.00	−.06	−.14	.10	.04	−.03

右上：日曜日　左下：平　日　｜男子　女子｜

昼間に主として行なわれることによるものであろう（なお，日常習慣との負相関は，外出中の食事の記入洩れが多いことによると考えられる）。

テレビ視聴が戸外遊びと相関がないことはやや意外な点である。この年齢段階では一般にいわれるようにテレビが戸外遊びの代替行動になるとは考えにくいわけである。それはおそらく，子どもの戸外遊びをする時間（昼間）に放送されるテレビの内容が，この年齢段階の子どもにとっては興味のもてるものでないということが一つの原因ではあるだろう。ただ，これは他のすべての相関についてもいえることであるが，両行動に共通に関連する要因についてもう少し詳細に検討しなければ決定的なことをいうのは危険である。

室内遊びと戸外遊びは，相関係数からみる限りある程度の代替性をもっている。とくに平日の昼間は外出も少いので，子どもの行動として室内で遊ぶか戸外へ出るかという二者択一的な自由度があるためと考えられる。この点についてはV章で問題にされるであろう。

2　1962年調査との比較

本調査の目的の一つは1962年調査との比較であり，そのため調査方法も対象も1962年調査に合わせたのであった。本節では，生活時間の構成について前回調査との比較を試みる。

すでにのべたように，前回調査の結果は階層ごとに分析されており，今回もその分析法を採用している。しかし，10年間の社会的変動の故もあって，サンプルの構成がまったく同じというわけではないという限定もある。しかし，時の大きな流れについてはある程度の推測が可能なものと考える。

1）　各行動にみられる変化

前節にならって各行動ごとに見ていこう。なお，表Ⅳ－1，Ⅳ－2を再び参照のこと。表中サンプル集計の計の欄の＊印は1962年調査と有意な差のあることを示している。全体集計はここでは参照しない。

a　睡　　眠

日曜日についてはまったく差がない。平日の睡眠時間は0.1％の危険率で男女とも有意に短かくなっている。これは他の行動時間の影響というよりは，生活のリズムの変化によるものと考えられる。ここでは時刻別の行動の推移をとりあげるのがテーマではないが，こと睡眠時間に関してはこれが大きくきいている。いま，平日の午後9時にまだ起きている子どもの比率を調べてみると，

男子　15%（1962年）⟶21%（1972年）

女子　12%（1962年）⟶19%（1972年）

となって，男子の方がやや宵っぱりであるという関係は変らないが，男女とも夜ふかしをするものがふえているのである。平日の朝は朝寝できないから，睡眠時間が減少するのも当然である。

ついでに日曜日について触れておく。日曜日の夜も，9時に目覚めているものは

男子　16%⟶19%

女子　11%⟶18%

と増加している。これが日曜日の睡眠時間の減少となってあらわれないのは，朝寝と相殺されるからにほかならない。すなわち，午前8時にすでに起きているものの率を比較してみると，

男子　78%⟶61%

女子　65%⟶61%

である。

ＮＨＫの生活時間調査（15歳以上対象）によると，現代の大人は次第に〝宵っぱりの朝寝坊〟になってきているといわれるが，その傾向がまさに子どもの生活の中にもあらわれているのである。子どもにとって決して健康的とはいえないこの傾向は，たとえば日曜日の朝8時すぎにもう外にとび出して戸外遊びをする子どもの減少というような状況にも反映されている。なお，時刻別の行動推移は次回の論文で検討する予定である。

b　日常習慣

特記すべきことはない。

c　学校生活

22，3分の増加を示している。午後1時および2時にまだ帰宅していないものの比率をみると

午後1時　71%⟶91%

2時　6%⟶12%

でそれを裏づけている。調査当日，学校での特別の行事のため帰宅時間がおそくなった学校が今回1校あったがその生徒数はごく少く，全体に影響を与えるほどのものではない。とすると，10年前に比べて学校での週当り授業時間の増加を示すものと考えられるが，前回の調査時の事情は調べてないのでそれ以上のことは不明である。

d　勉強時間

日曜日男子を除いて減少している。とりあえず考え得る理由は2つである。すなわち，小学校一年生の家庭学習の主体である宿題を出す先生が減ったか，あるいは前回の調査が記名調査であったために勉強時間を実状より多少とも多く書いたかである。もっとも，この2点とも確たる根拠はない。なお，時間数だけでなく，勉強をしたものの比率も，

日曜日　男子　53%⟶43%

女子　62%⟶43%

平　日　男子　81%⟶69%

女子　89%⟶58%

とかなりの減少を示している。

e　読　　書

日曜日男子で有意に増している。読書したものの率も

日曜日　男子　37%⟶51%

女子　41%⟶48%

となっている。子どもに与える図書の増加，戸外遊びの代替などが考えられるが憶測の域を出ない。

f　テレビ視聴

日曜日，平日とも減少をみせた。ことに階層Ⅰでの減少が著しい。階層ごとの減少状況はつぎのようになる。

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
日曜日	男子	35分	37	19	30
	女子	39	6	30	26
平　日	男子	23	10	20	18
	女子	27	3	15	15

その結果，視聴時間に差のみられなかった階層ⅠとⅡの間に差があらわれた（1. 1）参照)。調査当時は，テレビ視聴時間と戸外遊びの排反性を予想し，戸外遊びが減少してテレビ視聴が増加するものと考えていたが，前節でみたように，テレビ視聴と戸外遊びは時間数の上からいえば無関係で，テレビ視聴がむしろ減少するという結果であった。日曜日については外出時間の影響を考えることもできようが，平日はそれもない。

強いて原因を求めれば，

(1)　新奇効果がいまの子どもにはまったくないこと。

(2)　この年代の子どもの喜んで視聴する番組が減った（？）こと。

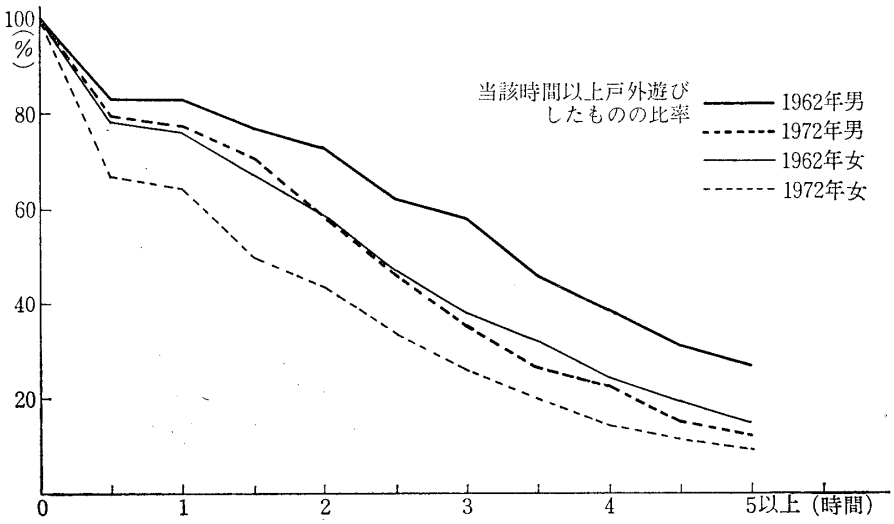
(3)　親のテレビ観の好意度が減った結果として子どもに見せることの制限が多くなったか，親自身の視聴時間が減ってそれが子どもの視聴時間にも影響したこと（ただし、一般成人の視聴量がこの間に減少したという証拠はない)。

のようなことがあげられる。そのほか，調査当日の放送番組がたまたま子どもの興味をひかなかったためということも考えられるので，Aグループと調査曜日の異るBグループの平日の視聴量を求めてみたが，当日午後に一時雨だったにもかかわらず，Aグループの視聴量にほぼ等しかった。(3)については，階層Ⅰの親の好意度がとくに減じたことと，同じ階層の子どもの視聴量が同様に目立って減少したことを結びつけて考えることができるかもしれない。

g　室内遊び

室内遊びをしたものの比率および時間の中央値はつぎのとおり。

日曜日	男子	64%⟶73%,	61分⟶89分
	女子	69%⟶77%,	75分⟶82分
平　日	男子	63%⟶%60,	44分⟶43分



図Ⅳ－3　戸外遊び時間累積百分率（日曜）

女子　73%⟶71%，　64分⟶69分

日曜日は平均で22，3分の増を示した。中央値では男子の増が著しい。日曜日は外出時間が増したので，それと排反的関係にある室内遊びは減少しても不思議はないが，実際にはむしろ増加した。その原因は主としてつぎの項でのべる戸外遊びの減少にあるものと思われる。

h　戸外遊び

日曜日・平日の男女とも減少を示している。中央値で比較するとつぎのようになる。

日曜日	男子	184分⟶125分（差59分）
	女子	127分⟶ 75分（差52分）
平　日	男子	114分⟶ 75分（差39分）
	女子	69分⟶ 46分（差23分）

階層別にみても，両日とも男子階層Ⅰおよび女子階層Ⅱを除いていずれも落ちこんでいる。全体としての減少状況を図Ⅳ－3，Ⅳ－4に示した。この図は横軸に記した時間以上に戸外遊びをした子どもの比率を示した累積百分率の図である。これによれば，日曜日には男女とも分布の型が減少の方向へ傾き，1972年の男子が，1962年の女子と似た分布を示している。長時間遊ぶ子どもはむしろ10年前の女子の方が多いほどである。平日は時間の自由度がもともとそれほど大きくないから日曜日ほどの大差ではないがやはり有意である。女子の場合，長時間遊ぶ子どもの率は10年前と変らないが，短時間のところで差がついている。戸外遊びの減少の原因については次章で討論する。

i　外　出

平日は時間の自由度が小さいためもあり，同伴すべき父母またはそれに代るものの不在や多忙もあって10年前とさしたる変化はない。一方，日曜日の増加はきわめて顕著である。それも外出率の変化（男子36→45，女子42→52）よりも外出の長時間化の方が目立つ。たびたび記したように，今回調査の外出時間の数字は本来もっと多い筈なのであるから(Ⅳ.1.1). iの項参照)，日曜日の生活構造それ自体を大きく変える現象といっても過言ではないであろう。

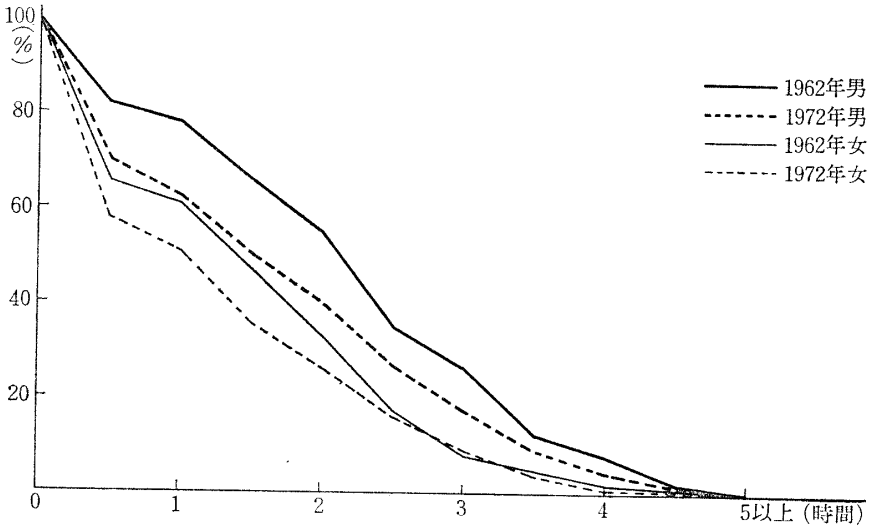
この主な原因は父母をはじめとする家族全体の生活構造の変化の中にあると考えられる。たとえば，

(1)　自家用の自動車保有者の増加　生活時間調査表の外出の項に記入された内容から，外出に自動車を利用したものがかなり多いことがわかる。また，このことは遠出一長時間化に影響している。

(2)　父母の余暇の増大　この年齢の子どもの外出は原則的には父母の同伴による。日曜日を完全に休日として利用できるようになった勤労者，日曜定休を実施する商工自営者などが増したことは，外出の機会をふやした。

(3)　経済的余裕　(1),(2)にもこのことは関係している。

以上のようなもののほかに，公害や遊び場不足の中でせめて休日ぐらいは子どもを解放したい，というような



図Ⅳ－4　戸外遊び時間累積百分率（平日）

父母の意識の反映があるかもしれない。

j　レッスン

前回の調査の際，この項はする者の比率も時間数も少かったので，集計の段階で「その他」に含めた。そのため，レッスンだけを直接的に比較することはむずかしいが，前回の「レッスンを含めたその他」よりも今回のレッスンだけの方がすでに多い（平日）ことからも，この行動の増加傾向はうかがわれる。その内容はピアノを中心とする器楽，習字，そろばん，勉強塾，水泳教室などである。

k　その他，不特定行動

（省略）

2）生活時間構成の変化と子どもの遊び

子どもの日常生活の時間構成の主要な変化はつぎのようにまとめることができる。

(1)　「宵っぱりの朝寝坊」への移行

(2)　学校生活時間の延長

(3)　テレビ視聴時間の減少

(4)　室内遊び時間の増加

(5)　戸外遊び時間の減少

(6)　日曜日の外出時間の大幅な増加

これらの変化の原因を今の段階で考えるならば，

(1)と(6)　子ども自身の変化というよりは父母の生活様式の変化に影響されたもの

(2)　おそらくはカリキュラムの過密化の結果

(4)と(5)　相互に関係し，いずれも地域の遊び場環境の貧弱さに主として原因があり，それはまた(6)の影響をうける

というように整理できよう（(3)は一つ二つの決定的な原因をつきとめることができない）。戸外遊びについてはそのほか，ピアノなどのレッスンによっても影響される方向にある（小学校中学年以上では，すでにけいこごとや勉強塾が大きな時間的阻害要因になっている）と考えられる。

以上の中で，室内遊び，戸外遊びの遊び場との関連については次章にゆずるとして，ここでは外出時間の大幅増大を遊びと関連させて考えてみよう。

外出（時間）の増加が子どもにとって好ましいことか否かは数字の上だけからは判断できない。しかし，外出時間と室内遊び，戸外遊び時間との間に負の相関関係があることを考えると，少くとも，外出して何をするのかは検討する意味がある。この点について，現在の段階では数量的に示すことはできないが，記入された外出先の多くはドライブ，買物，親戚の家である。デパートに出かけ，自家用車で遠出してただひたすら疲れて帰ってくることが子どもにとってどれほどの意味があるのか。子どもの欲求を満たすとすれば，それはそれで無価値とはいえないが，もっと別の行動形態はとれないものであろうか。

このようなタイプの外出をする意識としては，どこかへ子どもを連れて行くこと，それも遊園地へ行って乗り物に乗るというようなレディ・メイドの娯楽を与えることが子どもへのサービスであるという考えかたがあるといわれる。日曜日になるとどこか人の行く所に「行楽」にでかけて作られたレジャーを受動的にとりいれるという現代の大衆社会状況にのみこまれた行動が子ども連れの外出にも共通しているのではあるまいか。

もう一つの問題は，外出によって失なわれる友だち関係である。家族単位の外出は近隣の仲間たちとの接触の機会を奪う。そのことは外出する子ども本人だけでなく同時に，自宅にいる子どもの近所の遊び相手が欠けることを意味し，結局は子どもたちの相互の隔離を促すものとなる。小学校の中・高学年の子どもが，ふだん遊びたいのに友だちが塾などへ出かけてしまうため相手がいなくて面白くない，そこで友だちとの社交の場を求めて自分も塾へ出かける，という塾隆盛のパタンがあるが，仲間の不在という点では外出にも同様なことがいえるのではないか。

V　生活時間を規定する諸要因

子どもの生活時間を規定する要因はさまざまなものがある。各行動時間の性差，地域差，階層差などは，性や居住地域や親の社会階層が，直接あるいは間接に子どもの行動量をを規定する要因となっていることを示すものである。この章ではあらためて上記のほかのいくつかの要因をとりあげ，子どもの行動量との関連を見ることにする。

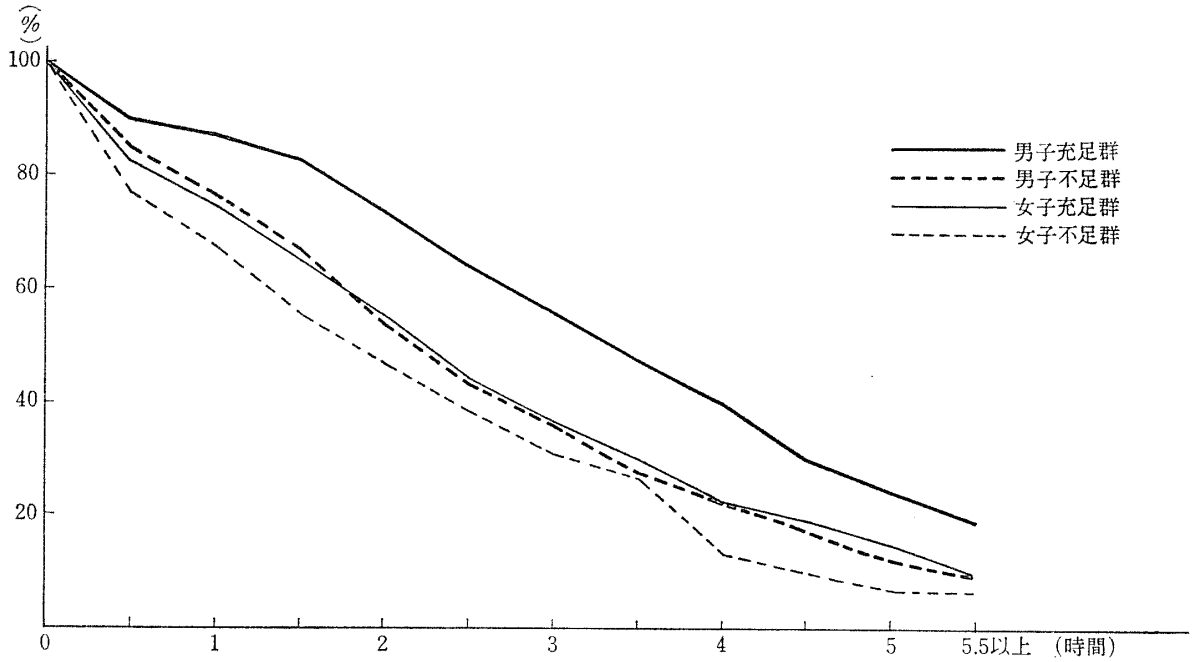
子どもの行動量に影響を与える独立変数としてここでとりあげるのはつぎの6変数である。

a　兄の有無　b　姉の有無　c　居住条件の一つの指標としての部屋数　d　親のテレビ観　e　親の遊び観（遊びか勉強か）　f　親のみる遊び場充足状況

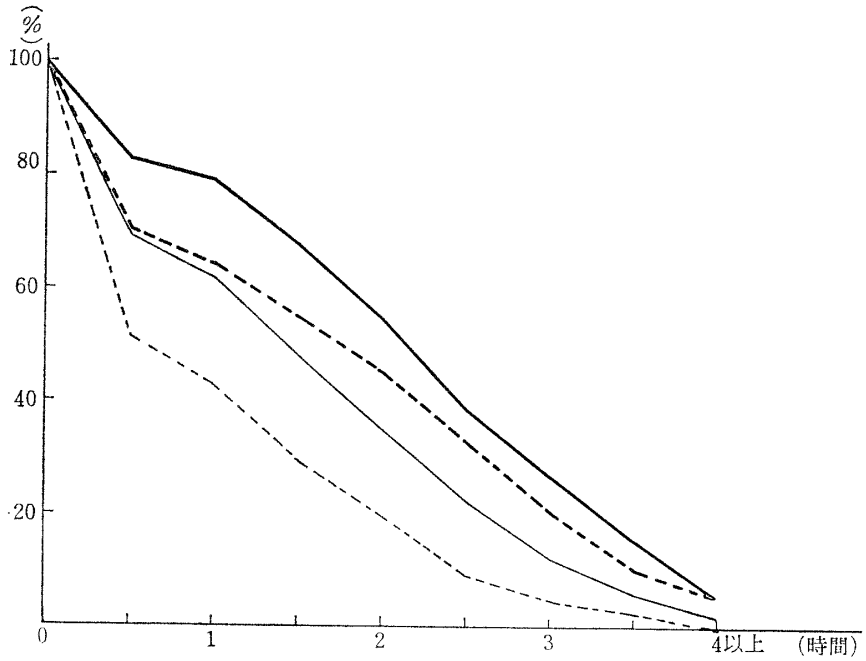
従属変数としての子どもの行動時間は，子どもにとっての中心的行動，すなわち，テレビ視聴，室内遊び，戸外遊びおよび日曜日の外出の4行動，中でも戸外遊びの量を中心に考察をすすめて行きたい。

1　遊び場充足状況と各行動量

われわれの調査の主要な関心である遊び場環境が子どもの遊び，ことに戸外遊びにどう関係しているかを見よ



図V－1　遊び場充足度別戸外遊び時間累積百分率（日曜日）



図V－2　遊び場充足度別戸外遊び時間累積百分率（平日）

うとするものである。

遊び場充足度によってサンプルを2群（「十分ある」の度数が少いのでこれを「一応はある」を合せて充足群とし，「ほとんどない」を不足群とする）に分け，各群での行動時間を見る。なお，その際，外出時間の多さが室内遊び，戸外遊び，テレビ視聴などに影響するので，外出時間の影響をできるだけ避けるために，外出とレッスンの時間の合計が平日で1時間以上，日曜日で2時間以上のものは集計から除外した。ここでは全体集計のデータを用いてある。また，この問題には地域の特殊性がからむことも考えられるので地域別に集計した。

結果は図V－1，V－2および表V－1，V－2，V－3。

戸外遊びは平均値で比較すると，日曜の男子37分，女子25分，平日の男子19分，女子28分の差があり，不足群は充足群の63～83%に当る時間しか戸外遊びをしていないことになる。分布が偏っているので中央値で比較してみると差はそれぞれ49分，20分，28分，50分となる。遊び時間を3段階（日曜日は0～60分，90～210分，240分以上。平日は0, 30～120分, 150分以上）に分けて χ^2 検定

表V－1　遊び場充足度と戸外遊び時間(地域別平均)

	日曜				平日			
	男		女		男		女	
	充足	不足	充足	不足	充足	不足	充足	不足
商	182	167	138	133	107	72	74	50
住	185	135	132	111	104	92	76	44
工	221	184	186	137	118	92	83	53
計	194	157	149	124	108	89	77	49
中央値	190	141	131	111	112	84	71	21

表V－2　遊び場充足度と室内遊び時間(地域別平均)

	日曜				平日			
	男		女		男		女	
	充足	不足	充足	不足	充足	不足	充足	不足
商	120	138	138	120	56	58	64	104
住	107	132	124	155	66	73	80	85
工	116	129	116	176	54	75	66	91
計	112	133	125	153	61	71	73	92
中央値	98	118	94	128	42	62	59	78

表V－3　遊び場充足度とテレビ視聴時間

	日曜				平日			
	男		女		男		女	
	充足	不足	充足	不足	充足	不足	充足	不足
平　均	151	162	150	161	123	131	122	123
中央値	132	154	135	142	120	130	118	115

した結果，日曜日男子($p<0.05$)，平日男子($p<0.01$)，平日女子（$p<0.001$）に差がみられた。なお，地域ごとに見ると差の大小はさまざまだが一貫して遊び場不足群の戸外遊び時間が短い。

戸外に遊び場をもたない子どもたちが，その代りに室内で遊ぶとすれば，不足群の室内遊び時間は充足群より多くなることが予想される。表V－2はその結果であるが，日曜日の商業地域女子を除いてすべてその傾向を示している。その差を平均値でみると，日曜の男子21分，女子28分，平日の男子10分，女子19分であり，中央値ではそれぞれ20分，34分，20分，19分となっている。室内遊び時間の多少をほぼ中央で2群にわけ（日曜日0～90分と120分以上，平日0～60分と90分以上）てχ^2検定した結果は，日曜女子（$p<0.01$）と平日女子（$p<0.05$）で有意であり，男子はいずれも$p<0.10$で有意水準には到達しなかった。

しかし，性，曜日，地域を通しての差の方向の一貫性から考えて，遊び場不足群が室内遊びをより多くする傾向があると考えることにそれほど無理はない。これを戸外遊び時間との関係でみるならば，遊び場の不足が戸外遊びの時間を減少させ，その時間の一部が室内遊びにとって代られるというパタンを考えることができる。

ただ，この場合の遊び場充足状況が親の認知を通してのものだけに，若干の異論が出ることも予想されないではない。すなわち，遊び場がないと認知する傾向の親は，たとえば戸外の危険を過度に重視する傾向があり，そのことが子どもの戸外遊びを制限し室内遊びその他に代えさせているのではないか，と。この解釈もある程度事実ではあろうが，すでに見てきた，遊び場充足度と遊び場の種類との関係や，1962年との比較による戸外遊びの減少と室内遊びの増加傾向などいろいろな結果を考えあわせると，遊び場環境の貧弱さが子どもの戸外遊びの少なさにつながり，遊び場環境の悪化が戸外遊びを減少させてきたというわれわれの仮説は残念ながら正しいといわざるを得ない。

なお，テレビ視聴量についても，遊び場不足群が僅かながら多く，戸外遊び時間の一部がテレビ視聴へと移る傾向と解することもできるが，この行動については統計的に有意な差はまったくないので，結論をさしひかえる。

2　その他の諸要因と各行動量

1)　兄・姉の有無との関係

兄あるいは姉の人数，本人との年齢差などにかかわりなく，兄・姉それぞれの有無を別個に行動量とクロスさせた結果が表V－4，V－5である。

兄の有無についていえば，有意なものは男子における平日の室内遊びのみであるが，日曜・平日，男女に共通して，兄のいる子どもの方が戸外遊びが多く，室内遊びが少いという傾向がみられる。小学校一年生の兄の多くは小学生であろうが，それらの兄の戸外遊びに誘発される結果と考えられる。姉についても，それを持つ子どもの戸外遊びが多い（平日は男女とも有意）が，室内遊びも多い傾向がある。小学校一年生の女子は男子より室内遊び量が多い傾向があったが，もっと上級でもおそらくその差は持続し，あるいは強まるであろうから，姉の場合に室内遊びも多い傾向は納得できる。室内遊びと戸外遊びを加えた全体の〝遊び活動量〟が，曜日や男女を問

表V－4　兄の有無と行動時間

（単位は分，カッコ内標準偏差）

		男子		女子	
		兄なし	兄あり	兄なし	兄あり
日曜日	テレビ	149(81)	134(72)	141(82)	136(73)
	室内遊び	102(94)	98(92)	115(115)	98(93)
	戸外遊び	141(118)	146(114)	105(107)	113(122)
	外出	107(155)	114(153)	118(148)	138(157)
平日	テレビ	125(67)	124(58)	112(64)	111(65)
	室内遊び	***60(63)	45(56)	×79(70)	61(68)
	戸外遊び	82(72)	90(80)	55(64)	×75(69)

× は $p<0.10$ 以下同じ。

表V－5　姉の有無と行動時間

		男子		女子	
		姉なし	姉あり	姉なし	姉あり
日曜日	テレビ	144(78)	×150(81)	141(78)	135(88)
	室内遊び	100(94)	102(94)	109(109)	122(116)
	戸外遊び	140(116)	151(120)	106(108)	113(120)
	外出	113(157)	92(156)	117(147)	144(164)
平日	テレビ	128(65)	111(60)	109(64)	123(62)
	室内遊び	56(64)	57(54)	73(67)	82(77)
	戸外遊び	82(75)	*94(70)	57(65)	**73(69)

わず，兄の有無による差はなく，姉の有無ではかなりの差になるのは説明しにくい点であるが，ともかく兄あるいは姉の有無が子どもの行動量を規定する一つの環境要因になっていると考えることができる。

2）部屋数と行動時間

居住条件として住居の広さを考え，住居の広さの指標として最も簡単な部屋数をとった。住居の広さは，もともと家族数などの相対的関係によって決るものだが，絶対的な広さも重要な要因と考えられる。そこで，家族数に関わりなく部屋数を1～2，3～4，5以上の3段階に分けて各行動量との関係をみたのが表V－6である。表に見る通りこの要因に最も関係の深いものはテレビ視聴量である。これは1962年調査の段階でも明らかにされている（依田，1964）が，テレビ視聴の現実をよく反映しているように思われる。

それは二つの面があるだろう。すなわち，狭い住居の中にテレビ受像機があることによって，何となくスイッチを入れてしまうというテレビ視聴の惰性的習慣性と，同様に，狭い住居の中で家族成員のある者がテレビ視聴をすれば，他のメンバーも，その意志の有無にかかわらずテレビ視聴せざるを得ないという追従性である。

いずれにしても，もともとは居住条件の悪さという物理的環境がテレビ視聴量を規定する大きな要因となっているのであり，これによって起り得るテレビ過視聴の弊害（1962年調査によれば，生活習慣が乱されるという見方が強い）は，家族全員がテレビ視聴を制限するなど惰性的視聴を防ぐというような個人の心理的努力に期待するだけでは限界があり，もっと根本的にはテレビを唯一あるいは最大の娯楽としないですむ家庭の文化的な豊かさや，余裕のある住宅事情などの社会的・政治的問題にまでさかのぼらねばならないであろう。

なお，以上のことから1962年調査に比してテレビ視聴量が全体として減少していることの原因を住宅事情の改善という点に求められるかもしれないと考え，両調査時における部屋数の分布を比較したところ表V－7の通りであって，この高度成長の10年間にもほとんどさしたる改善はみられない。ただ僅かに見られる階層Ⅲの部屋数の増加（ことに一部屋家族の減少）が階層Ⅲのテレビ視聴量減少の一つの要因となっていることは推測される。

表V－6　部屋数と行動時間

		男子			女子		
		1～2	3～4	5～	1～2	3～4	5～
日曜日	テレビ	×158 (82)	142 (75)	136 (80)	*147 (81)	143 (85)	122 (66)
	室内遊び	92 (93)	107 (92)	100 (96)	106 (107)	119 (118)	106 (103)
	戸外遊び	142 (122)	137 (118)	146 (108)	112 (112)	108 (107)	100 (114)
	外出	124 (157)	103 (153)	102 (163)	116 (140)	108 (144)	**154 (171)
平日	テレビ	**135 (73)	117 (63)	125 (55)	118 (65)	112 (64)	102 (61)
	室内遊び	52 (64)	55 (61)	62 (60)	74 (73)	78 (69)	73 (65)
	戸外遊び	*94 (75)	82 (69)	76 (80)	62 (65)	57 (68)	62 (64)

平日テレビは，部屋数1～2と3以上の差，他は部屋数1～2と5以上の差。

表V－7　部屋数の比較（1962年と1972年）

部屋数＼階層	I		II		III	
年度	'62	'72	'62	'72	'62	'72
1	2.7%	1.7	5.1	4.5	20.2	11.8
2	17.9	21.6	14.4	16.8	34.1	36.9
3	27.5	19.9	28.4	21.9	24.9	25.1
4	23.0	26.4	22.8	23.2	12.1	12.2
5	11.9	13.0	10.7	14.8	2.9	4.3
6	8.4	7.8	10.7	9.0	4.0	4.8
7	4.8	6.5	3.7	3.9	0.6	1.6
8以上	3.9	3.0	4.1	5.8	1.2	3.2
平　均	3.88	3.92	3.88	3.99	2.64	2.97

表V－8　親の遊び観と行動時間（単位：分）

		男子		女子	
		遊び	勉強	遊び	勉強
日曜日	テレビ	142(82)	153(68)	136(79)	141(81)
	室内遊び	100(95)	102(89)	114(115)	104(98)
	戸外遊び	145(123)	133(97)	112(113)	94(102)
	外出	**120(166)	76(124)	117(145)	136(164)
平日	テレビ	125(65)	123(64)	111(64)	113(64)
	室内遊び	57(62)	54(60)	**82(71)	57(65)
	戸外遊び	*89(77)	69(64)	60(67)	59(61)

テレビ視聴以外では，平日男子の戸外遊び量が部屋数と相関している。家の狭い子どもが外に出て遊ぶという因果関係が考えられるが，女子では差がない。外出については男女で傾向が異っていて説明がつき難い。

3）親の遊び観・テレビ観

われわれの調査した遊び観・テレビ観（Ⅲ．1参照）はかなり抽象的，一般的なものであって，その態度が子どもの行動時間に直接的に影響を与えると考えるのは少し無理かもしれないが，結果は表V－8（テレビ観との関係については表を略す）。遊びを重視する親の方が，平日の男子戸外遊び量，女子室内遊び量が多い傾向が一応みられる。ただし，勉強重視群の子どもたちが遊びの代りに勉強をしているかどうかについての資料はない。日曜の外出時間の差はここでも説明し難い。

テレビ観のいかんはテレビ視聴量の差に明らかな関係をもつとはいえず，むしろ戸外遊びの量と多少とも関係しているように思われる。すなわちテレビに対して非好意的な見方をする親の子どもの戸外遊び量がより多いという傾向が一貫してみられ，日曜日男子の場合有意となっている。

さて6個の独立変数と中心的行動量の関係を大ざっぱに見てきたが，この分析は独立変数としての個々の要因と従属変数としての4行動量との単純クロス集計であるため，資料の有効性の点が限界がある。というのは，これらの変数だけを考えてみても，それぞれが単独で子どもの生活時間に影響しているのではなく，また各行動量にも相互作用があるからである。われわれの関心は各独立変数の占める重みを求めて各行動量の予測をすることではないが，少くとも各要因間，各行動量間の相互作用についてさらに分析することによって，子どもの生活時間を規定する環境的背景をより明確にする必要がある。

（未完）

本調査に当って下記の調査対象校の一年児童（当時）の父母ならびに先生方に多大の協力をいただいた。記して厚く感謝の意を表する。

（東京都大田区立）出雲，北糀谷，糀谷，中萩中，萩中，羽田，羽田旭，東糀谷，東六郷，六郷，（杉並区立）松庵，杉並第二，高井戸，西田，（世田谷区立）池ノ上，（台東区立）浅草，金曽木，金竜，黒門，忍岡，千束，大正，東泉，二長町，谷中，（港区立）白金，高輪台，南山，本村，（目黒区立）大岡山，駒場，中根，各小学校。

また，調査の実施と結果の整理・分析についても多くの人々の協力を得たが，東京大学大学院学生撫尾知信，千葉大学教育学部学生大江紀久子，小川麻有美，新井和子，染野晴美，高橋幸子の諸君には，とくに多大の協力をいただいた。

（フェイスシート及び態度・意見調査用紙）

この用紙を持ち帰られたお子さまの性別と生年月をご記入ください。

性別　　男　女	昭和　　年　　月生れ

性別は一方を○でかこんで下さい。
生れた日はいりません。

以下〝お子さま〟とありますのは，すべて，この用紙をお持ち帰りのお子さまについて，おききするものです。お子さまが，2人以上いらっしゃるときは，どうぞご注意ください。

1. お父さま（またはお母さま）のご職業は何ですか。下の例を参考にして，具体的にお書き下さい。

職　業	勤　務　先	職　名	勤務先(自営も含む)全体の従業員数

（例）

放送局員	大東京放送編成局	テレビ編成部長	1,500 名
製パン業	木村屋（自営）	店主	家族を除き 10 名
自動車部品製作	水戸製作所	施盤工	15 名
職人	自営	大工	1 名（本人）

2. お父さま（またはお母さま）の最終学歴について下記の一つに○をおつけください。
   1) 小学校　　2) 高等小学校または新制中学校
   3) 旧制中等学校または新制高等学校　　4) 旧制高専または大学（旧制，新制）以上
   5) その他（具体的に：　　）

3. お宅の家族の方々全員（同居人を除く）について，下欄にご記入ください。

お子さまとの関係	年齢	家族	お子さまとの関係	年齢	家族	お子さまとの関係	年齢
本人							
父							
母							

4. お宅の部屋数（同居人の使っている部屋は除く）はいくつですか。……　　部屋
5. その部屋の〝たたみ数〟（洋間はたたみ数に換算してみてください）の合計はいくつですか。……　　畳
6. 小学校低学年の子どもの遊びについて２つの意見があります。あなたのご意見に近いほうに○をおつけください。
   1) 遊びは子どもの生活の中心であるから，子どもの遊びたいだけ遊ばせてやるのがよい。
   2) 子どもの将来のことを考えると，今のうちから，少し遊びを制限してでも勉強させた方がよい。
7. あなたが，お子さまの教育について持っておられるお考えは，次のどれにあたりますか。最も近いと思われるもの一つに○をおつけください。
   1) 子どもは，親がその将来について，とくにこまかく気をくばってやらなくても，能力に応じてのびてゆくものである。
   2) 子どもの将来については，いつも親が気をくばってやる必要はあるが，無理をしてはいけない。
   3) 子どもの将来については，子どもにとって多少無理と思われることがあっても，親が積極的にしむけてやるべきである。
8. テレビの教育的な益あるいは害について，どのようにお考えですか。次の意見のうち，あなたのご意見にもっとも近いもの一つに○をおつけください。
   1) テレビは教育的に好ましいものであるし，問題となるような害もない。
   2) テレビは教育的にみれば，とかく害もあるが，益の方が大きい。
   3) テレビは教育的にみて，よいともわるいとも云えない。
   4) テレビは教育的にみれば，益よりも害が大きい。
   5) テレビは教育的にみて，害こそあれ，益はまずない。
9. 「このごろの子どもは，以前にくらべて遊びの道具やおもちゃに恵まれすぎていて，遊びに工夫がたりない」という意見があります。あなたのお考えはどうですか。つぎの中から最も近いもの一つに○をおつけください。

1) その通りだ，と思う。
2) そういう面もあるが，一面では別の工夫が行なわれている。
3) むしろ，このごろの子どもの方がよく工夫していると思う。

10. 「このごろの子ども（小学生一般）は，安心して遊ぶ場所がなかったり，勉強に追われたりして，遊びをうばわれている」という意見があります。あなたのお考えはどうですか。
1) その通りだ。もっと遊ばせてやりたい。
2) いわれるほどでもない。子どもなりに十分遊んでいると思う。
3) むしろ遊びすぎているくらいだと思う。

11. 上の質問に関連し，お宅のお子さまの遊びについてどうお考えですか。
1) もっと遊ばせてやりたい。
2) 子どもなりに十分遊んでいると思う。
3) むしろ遊びすぎているくらいだと思う。

12. お宅の近くには，お子さまが安心して遊ぶのに適当な場所がありますか。
1) 十分にある。
2) 十分とはいえないが一応はある。
3) ほとんどない。

13. お子さまはふだん戸外で遊ぶとき，どんな所で遊んでいらっしゃいますか。できるだけ具体的にお書きください。

（生活時間調査表記入説明）

生活時間調査表(1)および(2)は，これをお持ち帰りになったお子さまの**3月5日（日曜日）**と**3月7日（火曜日）**の生活についておききするものです。起床してから就寝するまでの生活について，できるだけくわしくご記入ください。

記入の方法を説明しますと，

表の左側には，主だった行動が書いてあります。又，表の上には，午前6時から午後10時までの時間の目もりがついています。記入に当っては，時間を追って，**その時間に何をしたか**を，左の該当する行動の欄に線を引いて示していただきます。

なお，記入に当っては，右記の記入例（省略）を参照してください。

記入上の注意

○ 2つのことを同時にしている時，例えば〝テレビを見ながら，ごはんをたべる〟という場合には，〝テレビを見る〟と〝食事〟の両方の項目に記入してください。
○ あげてある項目のいずれにも入らない場合，又は，いずれに入れてよいかわからない時には〝その他〟の項に具体的に記入してください。
○ 備考欄には，番組名，書名，遊びの種類・場所，行き先などをなるべくくわしく具体的に書いてください。
○ 各項目の行動を誰と一緒におこなったかについては，その行動時間を示す線の所に本人，兄，父，母などと記入してください。
○ 通学時間とか，寝る仕度などのように，次の行動の準備として行なわれるものは，それぞれ〝学校での生活〟〝睡眠〟の中に含めてください。
○ 戸外での生活，**とくに，遊びの種類と場所**については，わからない点はお子さまにきいて，できるだけくわしく記入してください。

記 入 例（省略）

生活時間調査表（1）

3月5日(日曜日)

時刻 / 行動項目	午前 6.00	7.00	8.00	9.00	10.00	11.00	午後 12.00	1.00	2.00	3.00	4.00	5.00	6.00	7.00	8.00	9.00	10.00	備考
睡眠（ひるねを含む）																		
テレビを見る																		番組名（時間を追って順に記入）
本を読む（マンガ絵本を含む）																		書名（時間を追って順に記入）
外出・訪問																		行先を具体的に（例えば親戚の家というように）
室内で遊ぶ																		具体的に（例えば絵をかくというように）
戸外で遊ぶ																		遊びの種類と場所（例えばなわとび，道路というように）

今日のお子さまの生活の中で，ふだんの平日と特に変った点がありましたらお書きください。
（例えば，病気だった，というように）

注：一部を抜萃縮小したものである。